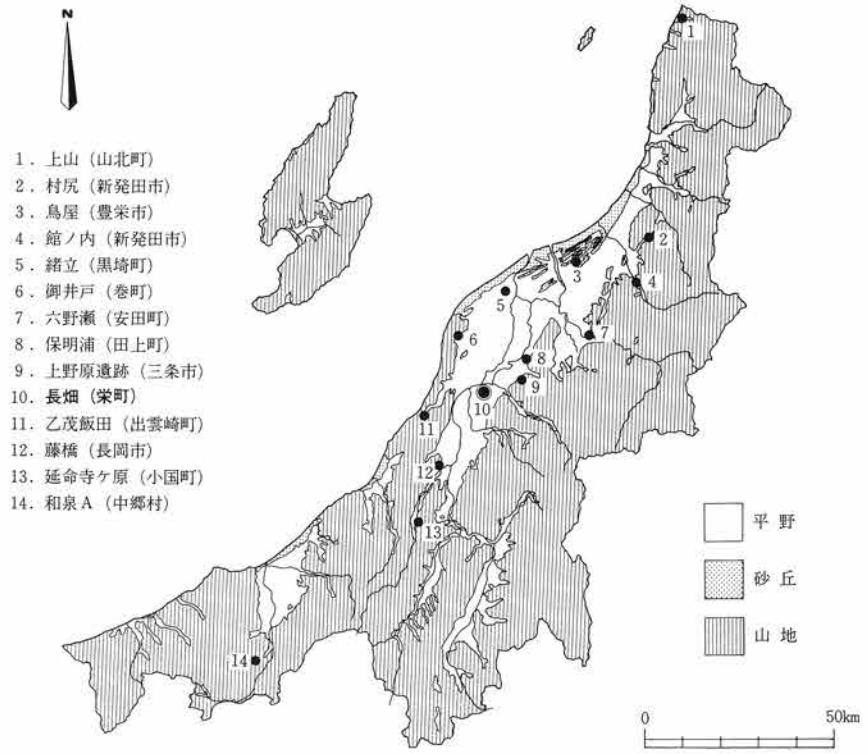
新潟県南蒲原郡栄町長畑遺跡出土の土器について
── 縄文時代晩期終末の様相 ──

荒　川　隆　史

1　は　じ　め　に

新潟県南蒲原郡栄町に所在する長畑遺跡は、新潟県教育委員会により1974年に初めて発掘調査が行われ、縄文時代晩期終末の浮線文を施す土器群が報告された〔戸根・本間1975〕（以下、1次調査とする）。その後、1978年に栄村教育委員会（当時）により1次調査区に隣接する区域の発掘調査が行われた（以下、2次調査とする）。この調査成果については、1979年刊行の概報において、復元可能な甕形土器や深鉢形土器の多いことや、籾痕のある土器片の存在などが報告され〔中島ほか1979〕、注目を集めた。そして、多くの研究者によって新潟県内の縄文時代晩期終末を代表する遺跡として位置づけられた〔石川1983、中島1986・関1986など〕。さらに、新潟平野における晩期終末の土器型式として豊栄市鳥屋遺跡の資料をもとに鳥屋式が提唱され、長畑遺跡資料もその重要な基準資料とされた〔石川1988〕。しかし、2次調査については、詳細な報告がなされないまま今日に至っている。浮線文土器群の研究が文様の多様性から浅鉢形土器に重点が置かれているなかで、この2次調査出土土器は甕形・深鉢形土器が極めて豊富であり、土器群全体の把握に欠かせない資料と考える。また、阿賀野川以北において該期の遺跡調査数が増加する中で、信濃川流域に位置する長畑遺跡資料の持つ意味は重要といえよう。ここでは、新潟大学考古学研究室に保管されていた長畑遺跡2次調査出土土器について報告することにより、縄文時代晩期終末の浮線文土器群の様相について考えてみたい。

なお、1990年に1次調査区の90グリッドラインより南西側に沿って確認調査が実施され、遺跡が西側に広がりをもつことが確認されている〔家田1990〕。この確認調査で出土した土器の一部も併せて報告する。



第1図　縄文晩期終末の主要遺跡位置図

2　長畑遺跡２次調査の概要

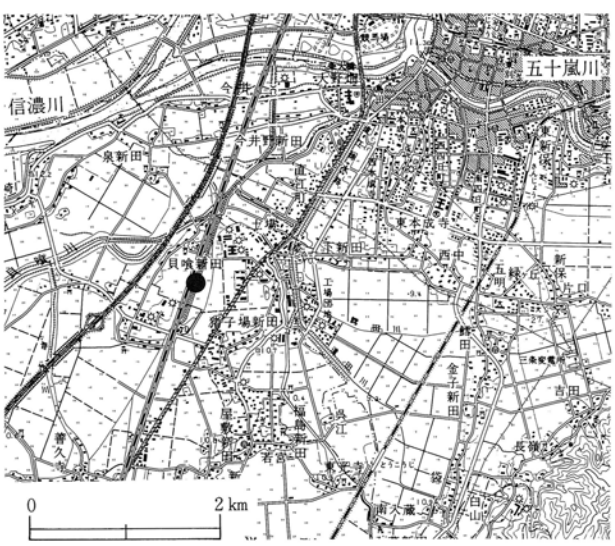
本遺跡は、新潟平野のほぼ中央部、南蒲原郡栄町大字貝喰新田・福島新田丙の両地域に所在し、標高は10ｍ前後を測る（第２図）。遺跡の東側には東山丘陵があり、西側では刈谷田川が、北東では五十嵐川が信濃川に合流する。遺跡の周辺はこの三河川の堆積によって形成された沖積地である。遺跡の現況は水田であったが、付近の半ノ木・曽根集落は東西に細く帯状を呈しており、自然堤防上にあるものとみられ、本遺跡もボーリング調査結果から自然堤防上に立地していたと推察されている〔本間・戸根1975〕。

次に、２次調査の概要について調査概報から引用・紹介する。調査は刈谷田川農業水利事業中央幹線排水路工事に伴い、1978年７月31日～９月１日の約１ヵ月間行われた。調査対象地は、１次調査の東側に沿っていて、面積は約2,600㎡である（図３）。遺物の出土が多く予想される地点を中心に、南北（Ｙ軸）140ｍ、東西（Ｘ軸）18ｍの長方形の範囲を決め、北東隅を起点に２×２ｍのグリッドを設定した。なお、Ｙ軸は上越新幹線の大宮より232km～232.14km間と平行するように設定している。グリッドの呼称にはＹ軸にアラビア数字、Ｘ軸にアルファベットを用いた。グリッド設定範囲は地表から約50㎝を重機で削平した後に、トレンチを開けて遺物・遺構を確認し、遺物量の多い箇所を中心に発掘範囲を広げた。しかし、遺物が地表下2.5ｍを超えて出土したことや湧水による壁面の崩壊等により、遺物が集中的に出土した41～60列についても包含層を全面的に調査することができなかったという。

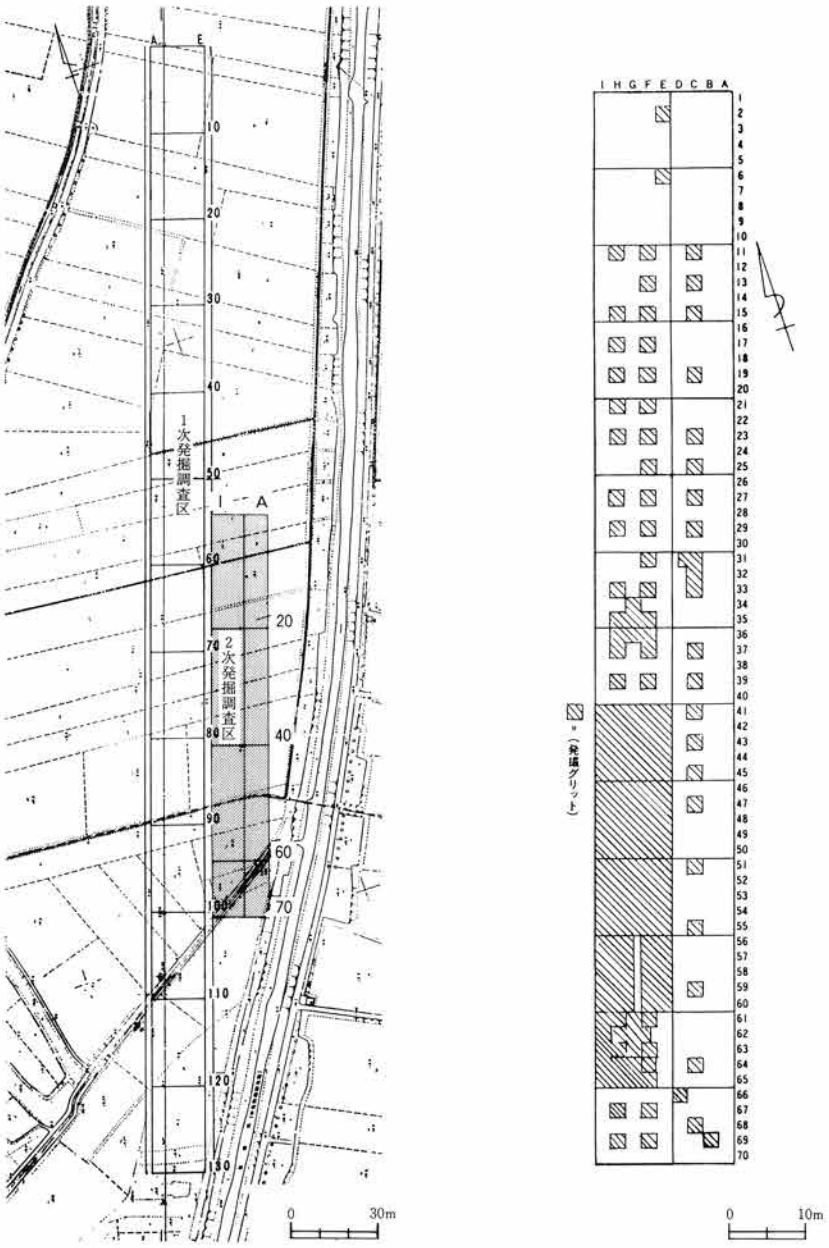
遺跡の層位は地区によって異なるものの、ほぼ水平堆積を呈す（図４）。Ⅰ層は耕作土で10～20㎝堆積する。Ⅱ層は腐植土で30～40㎝の厚さで堆積する。Ⅲ層は沖積土で、砂層・シルト層・粘土層が互層を成し、淡灰色から淡青灰色・青灰色を呈す。それぞれの層の堆積状況は地区により異なっているため、単一の層としてとらえられない。Ⅳ層は粗砂層で、地表下約1.5～2.5ｍほどのところで現れる。この層からも遺物は出土するものの、これ以下の調査は為されておらず、基盤層は不明である。シルト層・粗砂層中には金雲母・長石・石英・輝石など、本遺跡出土土器の混和材に利用されている鉱物と同様のものが含まれる。

検出された遺構は、土壙２基、ピット４基、井戸址２基、その他溝状遺構がＦ37グリッドから検出されている。そのうち土坑・ピット各１基が縄文時代晩期のものと推定され、他の遺構は歴史時代のものと考えられている。遺構内から出土した遺物は少ない。

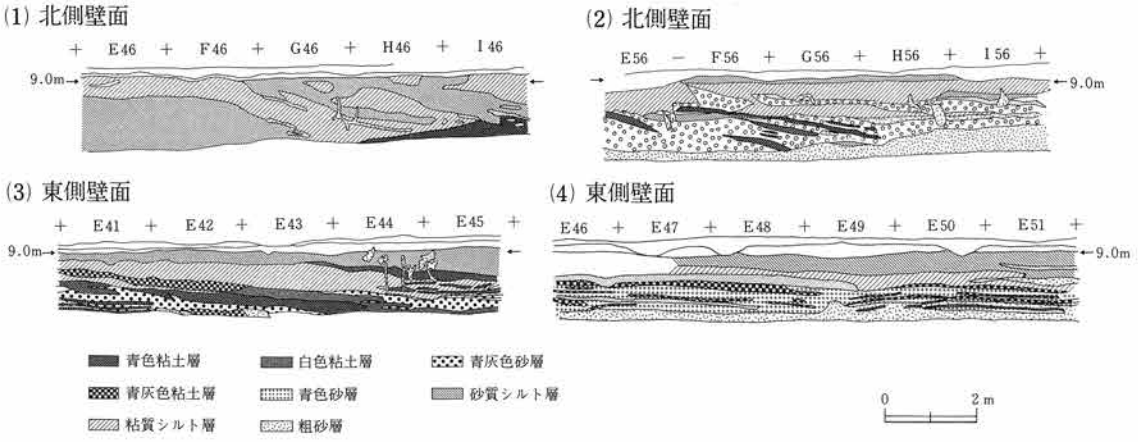
遺物は、Ⅱ層から若干の須恵器・陶質土器が出土している。本遺跡の主体をなす縄文時代晩期の遺物は、調査区の南側で多く出土し、特に45～65・Ｅ～Ｉグリッドに集中している。１次調査では南北360ｍの範囲が調査されているものの、報告書に掲載されている遺物の出土地点は85～115列に集中しており、２次調査の遺物集中範囲に隣接している。おもにⅢ層のシルト層中から検出され、Ⅳ層粗砂層中にもわずかに含まれる。土器は甕形土器や深鉢形土器が１個体分まとまって出土する場合が多く、土器復元率が高いことが特徴である。石器は石鏃・石錘・石斧・凹石・石皿・敲石が出土しているものの、１次調査に比べ出土量はきわめて少ないことも特徴的である。



第２図　長畑遺跡周辺の地形
（国土地理院「三条」1:50,000原図 平成元年発行）



第3図　調査位置図およびグリッド設定図（中島ほか1979年に加筆）



第4図　土層断面図（中島ほか1979に加筆）

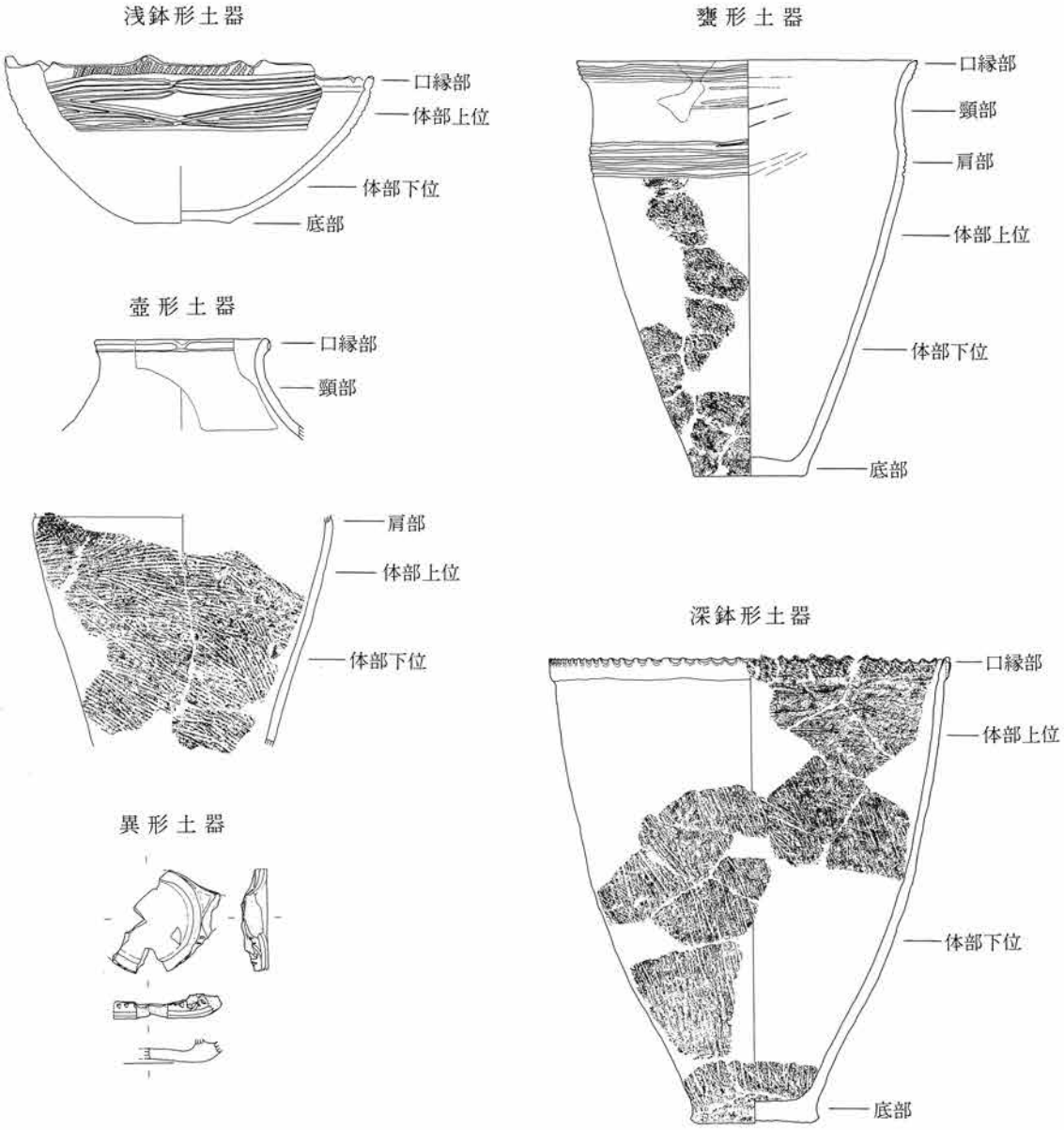
3　出土土器について

A　土器各説

(1)　大別器種分類および観察基準

出土土器の分類にあたっては、器形の特徴から浅鉢形・甕形・深鉢形・壺形土器の大別器種を設定し、文様や器形により細別を行った。また、口縁部形態や器形にもいくつか種類があるため、それぞれに基準を設けた。さらに、各器種とも部位の名称を決め、部位別の文様・調整について観察した（第５図）。観察の詳細については観察表に記載した。なお、観察表中の「＋」記号は文様・調整を加えることを意味し、「↑」などの矢印は施文・調整方向を示す。法量は器形の外寸を計測した。体径は、肩部あるいは体部の最大径を意味する。色調は「新版標準土色帖」〔小山・竹原1990〕に従った。

浅鉢形土器　口径が器高を上回るもので、口縁部～体部の屈曲が少ないものである。部位は口縁部・体



第５図　大別器種分類および各部位の名称

部上位・体部下位・底部に分かれる。

器形　1－口縁部が内傾するもの、2－体部から口縁部にかけて直立、あるいは直立気味のもの、3－口縁部が直線的に外傾するもの、4－頸部無文帯を有し、口頸部が外反するもの、の4つに分類した。

甕形土器　器高が口径を上回るもので、屈曲する頸部を有する器形である。上から口縁部・頸部・肩部・体部上位・体部下位・底部の各部位に分かれる。

器形　口頸部の傾きから1～3に分類した。1－口頸部が内傾し口径が体部最大径を下回るもの。2－口径が体部最大径とほぼ同じもの。頸部の屈曲が強いものと弱いものがある。3－頸部が外傾または外反し、口径が体部最大径を上回り最大となるもの。頸部の屈曲が強いものと弱いものがある。

口縁部形態　口縁部外面の作成方法には2種類あり、粘土紐を二重に貼り付けて肥厚させる複合口縁のものをa類、肥厚しない単純口縁のものをb類とする。

深鉢形土器　器高が口径を上回るもので、口縁部から体部にかけて明瞭な屈曲部を有さないものである。部位は上から口縁部・体部上位・体部下位・底部に分かれる。

器形　1－口縁部が内湾するもの、2－口縁部が直立するもの、3－口縁部が外傾または外反するもの。

口縁部形態　甕形土器と同様にa類－複合口縁とb類－単純口縁がある。

壺形土器　頸部がすぼまり、口径が体径よりかなり小さいもの。部位は口縁部・頸部・肩部・体部上半・体部下半・底部に分かれる。個体数が少なく器形を把握しにくいため、器形についての分類基準を設定していない。

異形土器　底部の両端が船首状に突出しているものである。上部を欠いているため全形を知ることができない。1点のみ出土している。

(2) 浅鉢形土器

主に体部上位の文様により細別を行った。

A類　沈線にミガキを加えたり、さらに彫去することにより、細く整えた浮線で浮線文を描くものである。モチーフの種類によりさらに細分される。

A1類（1・6）－菱形や三角形を横に連ねた網目状のモチーフで、1条の浮線で描かれるものである。1は直線的な浮線で表現されていて、モチーフが多段化している。6は交点部分のみ確認できるが、おそらく浮線が上下に連結して網目状のモチーフとなるものであろう。

A2類（2・3・7・51・52）－2～5条の浮線により斜線を加えた「Z」字状のモチーフを、浮線の交点部を軸として対称に組み合わせたものである。2は大形のもので、口縁端部に2種類の突起が合計10単位配される。浮線文の交点は、浮線を上下に押圧することにより作り出していることが明かである。中央の菱形の部分は、浮線の脇を彫去したり顕著なミガキを加えたために器面に盛り上がりがみられる。3は器形3で、口縁端部に2対小突起を配す。体部上位の文様帯は上1条、下2条の沈線で区画され、その中にZ字状に浮線を施す。7は2に似たモチーフである。中央の菱形の部分には、彫去したあとに新たに粘土が盛られている。51の交点も上方からの押圧による。52は口縁部に近い破片で、内面が肥厚する。

A3類（5・8・53～57）－紡錘形の構図をとるものである。5は上端の隆線上に列点文が施され、その下に浮線2条により紡錘形のモチーフが描かれる。口縁部内面はやや肥厚し、平行沈線文が1条施されている。8は上下を1条の平行沈線で区画した文様帯に、浮線3条からなる紡錘形のモチーフを横に連ねる。交点は上下の押圧により連結されている。口縁部内面は肥厚し、平行沈線が1条走る。53は8と同様

の構図をとるが、文様帯幅は８より広く沈線のケズリ込みが深く広い。内外面に丁寧なミガキが施され光沢を放つ。54は器形３で、口縁部内面が肥厚して稜をもつ。浮線は細く、途中から分岐している。交点は上下の押圧により粘土が寄せ集められ盛り上がりをみせる。55も54と同様に浮線が細く多条化している。

Ａ４類（４）－匹字文が上下対称に向き合い、横方向に連結せず反転するものである。口縁部に縄文ＬＲを施し、体部上位と１条の沈線文で区画する。浮線脇をさらに深く彫り込むことで強調する手法は２などと同様である。しかし、浮線はミガキが不十分のためか他のものに比べ太い。また、体部上位と体部下位との境目がミガキにより一段低くなっているのも特徴的である。

Ａ５類（58）－三角形のモチーフを上下交互に連続するものである。交点には縦に刻みが入る。

Ｂ類（59～61）－平行沈線文が施されるものである。59・60は、内外面にミガキが丁寧に施される。61は器面が粗く雑な感じを受けるが、沈線内には赤彩痕を確認できる。口縁部内面が肥厚している。

Ｃ類（62～64）　東北地方に普遍的に存在するもので、搬入品の疑いがあるものである。62・64は、匹字文を施すものである。いずれも口縁端部に沈線が施される。内面には明瞭な稜を有し、平行沈線が１条施される。全面が研磨される。63も胎土から搬入品と思われる。

Ｄ類（９）　体部と口縁部の間に頸部無文帯を有するものである。口縁部は縄文ＬＲを地文として平行沈線文を施し、肩部は浮線により羽状沈線文が描かれている。頸部は横位にミガキを施す。こうした器形は数少ないものの、鳥屋遺跡昭和32年発掘資料〔小出・寺村1961〕や三条市上野原遺跡〔中島1981〕に同様のものがみられる[1]。

(3) 甕形土器

口縁部および肩部の文様に特徴があるため、これをもとに細別を行った。なお、器形の大小や精製・粗製の差は考慮せず一括に扱った。

Ａ類（65～69）－口縁部や肩部に浮線文や工字文を施すものである。口縁部形態はｂ類のみである。65は口縁部に平行沈線を６条引き、浮線を下方にのみ押圧して連結させるもので、本遺跡では特異な手法である。口縁端部には刻目文が加えられる。66は口縁部が直線的に外傾するもので、匹字部分のみ残るが、三角形を横位に連結させるモチーフであろう。67は肩部に２条１対の浮線により菱形が上下に多段化する浮線文が描かれる。68は体部に条痕文を施し、肩部に浮線文が施される。69は肩部に沈線による工字文が描かれる例である。

Ｂ類（10～19・37・70～84）－口縁部や肩部に平行沈線文を施すもので、肩部に羽条沈線文をもつものも少なくない。口縁部形態はａ類・ｂ類の両方がある。肩部に平行沈線文をもつものは10～12・19・70・74～76である。10は体部に縄文ＬＲが縦走するが、ミガキにより縄目が原形をとどめていない。11は口頸部が外反する器形３で、複合口縁上に太めの沈線文が引かれる珍しい例である。頸部には縄文ＬＲが部分的に施されるが、ナデ消えしている部分が目立つ。また、肩部の平行沈線文間の隆帯上に列点文が施される。16は口縁部に縄文Ｌのみ施され、肩部では平行沈線施文後に条痕文を縦走させている。19は内外面のミガキが丁寧なもので、肩部にのみ平行沈線文を施す。このほか肩部に文様をもつものとして、13は肩部に沈線により上下に対置して横位に連結しない匹字文が描かれる。匹字文の左側には「日」字状沈線文があり、補助単位文と考えられる。こうしたモチーフは、後述する1990年度確認調査資料131と同じ構図である。体部には細密条痕が施される。14は肩部に羽状沈線文を描くもので、口縁部と肩部以下の地文は細密条痕である。ほかに羽状沈線文を採用するものとしては、条痕文を地文とする77～79・82、縄文ＲＬを

地文とする81があり、37は浅鉢形土器の浮線文Ａ２類に類似する羽条沈線文が施される。80は肩部に沈線４条による半円状の弧線文を上下交互に描いている。外面のミガキが顕著である。15・17・18は肩部に単位文様をもたないものである。15・17は肩部に肩部以下に条痕文を施すもので、いずれも口縁部と肩部に縄文を施すが識別できない。18は口縁部・頸部下半～肩部に結節縄文ＬＲを地文とし、口縁部に平行沈線文を施す。口縁部直下に強いナデやミガキを加えることによって屈曲部を作り出している。70～73は口縁部に結節縄文や各種縄文を地文として平行沈線文を施すもので、口縁部形態はいずれも単純口縁ｂ類である。73は小形のもので、文様帯幅が狭く、頸部のナデ・ミガキにより口縁部が肥厚している。83・84は頸部に文様を施すもので、83は鋸歯状沈線文、84は半截竹管状の工具で波状沈線文が施される。

Ｃ類－各種縄文を施すもの。縄文の種類によりさらに細分する。

Ｃ１類（20～25・85～94）－口縁部に結節縄文を施すもので、本遺跡の甕形土器を代表する種類である。ＬＲ、Ｒ、Ｌの３種類がある。肩部にも同様の結節回転や斜縄文を施すものが多い。また、口縁部形態は複合口縁ａ類がほとんどである。20は口縁部と肩部に結節縄文ＬＲを２～３段施し、肩部にはさらにミガキを加える。口縁端部には沈線が１条引かれる。21も同様に結節縄文Ｒを施すが、体部はケズリを縦位に施した後にナデ・ミガキを加えている。22は肩部以下で条痕文に結節縄文を加える例である。23は結節縄文ＬＲを体部下半まで施し、さらに横位のミガキが加えている。24は口縁部が無文のもので、肩部以下は結節縄文ＬＲである。25は口縁部直下に強いナデを加えることにより口縁部下端を肥厚させ、その下部にも同様な方法で隆帯を３条作り出している。隆帯上には列点を加えている。頸部下半はケズリの後に丁寧なミガキを加えている。85の口縁部は結節縄文Ｌだが、肩部は縄文ＬＲで２種類の縄文を用いる。93は口縁部が縄文Ｌで肩部に結節縄文Ｌを施す。94は唯一の単純口縁ａ類の例だが、頸部を無文として横位のミガキを加える手法は他と同様である。

Ｃ２類（26～29・95）－口縁部に撚糸文や網目状撚糸文を施し、肩部にも同様の文様を施すものである。口縁部形態は複合口縁ａ類が多い。26は口縁部に弧状の隆帯が付くもので、撚糸文Ｒが横走する。肩部以下には条痕文が縦走し、肩部には横位に撚糸文を加える。27は小形のもので、口縁部と肩部以下に撚糸文Ｒが横走する。95は口縁部に撚糸文Ｌが施される。28・29は網目状撚糸文を施すものである。

Ｃ３類（30・96・97）－上記以外の縄文を施すものをまとめる。30は肩部以下に条痕文を施した後、口頸部にＬＲ縄文を施す。頸部を無文帯としないのが特徴である。また、条痕文施文後にミガキなどの調整をまったく加えていないのも本遺跡では珍しい。96は口縁部に縄文ＬＲを施す。97は口縁部に附加条縄文を施すものである。原体は、ＬＲの軸縄に附加条を右巻にしたものである。

Ｄ類（31・32・98・99）－口縁部や体部に条痕文を施すものである。31は口縁部に短沈線４条による鋸歯状沈線文が描かれ、肩～体部にかけては条線間の広い条痕文が施される。32は大形のもので、口縁部と肩～体部に条痕文が施される。条痕文の原体には、半截竹管状の工具が用いられた可能性が高い。98は口頸部に条痕文が横走する。条線の彫りが深く、工具には細い棒状のものを束ねたものか櫛歯状のものを用いた可能性が高い。99は口縁形態が単純口縁ｂ類で、これも口頸部に条痕文を施したものである。

Ｅ類（33～35・100～104）―全面無文のものである。口縁部形態は複合口縁ａ類が多い。34は肩の張りが明瞭なもので、口縁部～肩部は横位に、体部は縦位にミガキを加える。底部付近には横位にミガキが施され「く」の字状を呈する。33は頸部以下に横位のミガキが施され、底部付近ではケズリの後にナデ・ミガキを行う。内面は口頸部に輪積み痕やナデ痕が明瞭に残り、体部下半には幅1.5㎝ほどの工具による擦痕が明瞭に観察できる。35は肩の張りが弱く口縁部が強く外反するもので、鳥屋式土器圏内においては珍

しい器形といえる。口縁端部は外方を向いていて、ナデ・ミガキにより平らに整えられ波状を呈していて、中部高地の氷Ⅰ式の甕形土器にみられる口外帯に似ている。100～104はいずれも口縁部形態ａ類で、104は肥厚部が短く、頸部が長いのが特徴的である。

Ｆ類(105・106) －口縁部外面の肥厚部が多段化するものである[2]。105・106は、頸部の屈曲が少なく口縁部がやや外傾する。凹線部と頸部に強いナデ・ミガキを施すことにより肥厚部を３段形成している。肥厚部の頂点はミガキのため尖っている。106の肩部には条痕文を横位に施す。胎土、色調とも本遺跡に少ないものである。

Ｇ類（36）－口縁部と肩部に刺突文を施すものである。刺突は下方から斜位に無数に施すことにより斜縄文風に仕上げている。工具は細い先の尖った棒状のもののようだが、不明である。一度に数カ所施した可能性もある。刺突施文後、全面に丁寧なミガキを加えているが、器面がまだ乾かないうちに行ったため刺突文が消えてしまった部分もある。こうした擬縄文と思われるものは、黒崎町緒立遺跡出土の上野原式の深鉢形土器にも見られる〔磯崎1969〕。

(4) 深鉢形土器

口縁部の文様により細別を行った。

Ａ類（107）－口縁部に浮線文を施すものである。３条の浮線間を上下交互に連結するモチーフとみられる。交点上には縦に刻みが入る。

Ｂ類（38・39・108～112）－口縁部に平行沈線文や羽条沈線文を施すものである。口縁部形態はｂ類のみである。38は口縁部に幅の広い平行沈線文を施したため、沈線間が浮線状を呈す。体部には条痕文を施す。39は口縁部に羽状沈線文を施すものである。体部は条痕文を施した後にミガキを縦位に加える。108・109は口縁部に斜縄文を地文とし平行沈線文を施す。また、110・111は条痕文を地文とするものである。112は口縁部が外傾する器形３で、平行沈線文２条を施す。

Ｃ類―各種縄文を施すものである。縄文の種類によりさらに細分する。

Ｃ１類（113・43）－結節縄文を施すものである。43は口縁部形態ａ類で、口縁部と体部上位に結節縄文ＬＲを施す。体部は擦痕を伴うナデとミガキが縦位に施される。113は口縁部上位に強くナデ・ミガキを加えて器面をくぼませ、下位に結節縄文ＬＲを施す。内外面とも器面は研磨される。

Ｃ２類（40・44・45・114）－撚糸文を施すものである。40は撚糸文Ｒを口縁部は横位に、体部上位は斜位に、体部下位は縦位に施している。44は口縁部に条痕文かあるいはナデの工具痕かと思われるものの上に撚糸文Ｒを横位に施し、体部上位～下位では斜位に施す。114は口縁部形態ａ類で、口縁部に撚糸文Ｒ、体部上位に縄文ＬＲを施す。45は単軸絡条帯第４類〔山内1979〕を施すもので、口縁部は横位に、体部下位は縦位に施す。体部上位は無文で横位のミガキ、下位には縦位のミガキが加えられる。内面は器面の凹凸は著しく、器厚が厚いのも特徴である。単軸絡条帯第４類は本資料のみで珍しいが、施文・調整手法は他と共通する。

Ｃ３類（41・46・115）－口縁部に縄文ＬＲを施すものである。体部に条痕文を加えるものが多い。口縁部形態はａ・ｂ類がある。41は口縁端部を押圧することにより波状を呈す。体部上位は無文で横位のミガキを施す。体部下位は条痕文を縦位に施し、ミガキを加える。46は口縁部に縄文ＬＲ、体部には条痕文を斜位に施す。内面は研磨される。

Ｄ類（47・116）－条痕文のみを施すものである。116は口縁部形態ａ類で、肥厚部を作り出した後に体

部から口縁部にかけて条痕文を施す。47は口縁部形態ｂ類で、条痕文を口縁部で横位、体部上位で斜位、下位で縦位に施す。

Ｅ類（48～50・117）―全面無文のものである。48は口縁部形態ａ類で、横位のミガキを施す。49は体部から口縁部にかけてあまり外傾せずに立ち上がる。口縁端部は波状を呈す。ミガキを口縁部～体部上位は横位に、下位は縦位に施す。50は体部上位から口縁部がやや外反する大形のものである。口端部は押圧により波状を呈す。ミガキを口縁部と体部上半は横位に、体部下半は縦位に施す。117は口縁部形態ｂ類で、ナデによる擦痕が内外面に認められる。

Ｆ類（42）―幅の広い沈線を施すものである。口縁端部は波状を呈し、口縁部には丁寧なナデによる幅の広い沈線帯が２条作られる。沈線帯間の幅は狭く、隆線状を呈す。体部は条痕文を縦位に施す。甕形土器Ｆ類にも類似する。

(5) 壺形土器

文様と器形により細別した。

Ａ類（118）－口縁部から頸部にかけて縄文Ｌを地文とし、やや浮線化した隆線により工字文が描かれる広口壺形土器である。外面には赤彩痕が観察できる。

Ｂ類（119・120）－小形壺形土器でミニチュア品を含む。119は肩部から体部に浮線３条による網目状の浮線文が描かれるが、モチーフは浅鉢形土器Ａ１類と共通する。120はミニチュア品で、頸肩部境界に平行沈線文が施されている。

Ｃ類（121）－「く」の字状に屈曲する短い頸部を有するものである。口縁部形態は複合口縁で、口縁部に結節縄文Ｌを施す。頸部には丁寧なナデ・ミガキを施し、内面もナデ・ミガキで仕上げる。

Ｄ類（122）－口頸部が直線的に外傾するもので、頸部の屈曲は少ない。口縁部に平行沈線を６条施し、内面にも１条施す。内外面ともミガキで仕上げする。

Ｅ類（123・124）－頸部が内傾する広口壺形土器である。123は口縁部が頸部より一段高く肥厚し、信州地方に特有な口外帯を思わせる幅の広く浅い沈線が施される。内外面とも丁寧なナデ・ミガキを施す。124は頸部を横位に研磨することにより、肥厚する口縁部と肩部の明瞭な段を作り出している。口縁部と肩部には条痕文を施すが、肩部にはミガキが加えらていない。甕形土器の可能性もある。

Ｆ類（125）－無文の大形壺形土器である。頸肩部境界の屈曲が緩く、器面は丁寧なナデとミガキで仕上げるが、摩滅のため不明瞭である。

Ｇ類（126・127）－体部に貝殻条痕文を施す大形壺形土器である。126は条痕施文後、肩部に平行沈線文を引く。127は肩部に条痕文に加えて縄文ＬＲを施し平行沈線文を引いている。こうした貝殻条痕文を施す大形壺形土器は鳥屋遺跡第３号土坑出土の壺形土器〔石川1988〕に類例が求められ、特に127は肩部に縄文を加える点で近似する。

Ｈ類（128）－体部に平行沈線文の上下に渦巻文と思われる沈線文を描くものである。外面には赤彩が観察され、胎土・色調とも本遺跡の一般的なものと異なる。細片のため器形は不明であるが、体部に渦巻文を施す手法は長野県御社宮司遺跡・石行遺跡などに散見される無頸壺形土器を想起させる。

Ｉ類（129）－刻目文が施された突帯が付くものである。内面の調整から壺形土器と判断したが、細片のため器形は不明である。

(6) 異形土器（130）

底部が舟形を呈するものである。外面には平行沈線文と列点文が描かれ、赤彩痕が観察される。この土器の上部は、欠損部が円筒形であることや内面が荒いナデ仕上げであることから、浅鉢形ではないことが窺える。

(7) 1990年度確認調査資料（131）

1990年に1次調査区の西側で行われた確認調査時に出土した資料で、確認調査報告書〔家田1990〕に掲載されているものを再実測したものである。131は浅鉢形土器で、口縁部が直立する器形2である。隆線により匹字文を上下対称に組み合わせ、横方向には連結しないものである。こうした構図は鈴木正博氏の大洞A$_2$式の「変形匹字文」に類似する〔鈴木1991〕。ただ、この文様間に本来補助単位文として配置される斜線文の代わりに、「回」字状文や3条単位による平行短沈線文が付される点が異なる。

B 調整・施文手法の分析

本資料における甕形・深鉢形土器には、全形を知り得るものが多い。そこで、それぞれの施文・調整手法とその特徴を明らかにした後に、その方向について類型化を試みたい。なお、ここで取り扱う文様は、条痕文と撚糸文とする[3]。

(1) 甕形土器・深鉢形土器の調整・施文について

甕形土器　外面調整は、口縁部から体部では基本的にケズリやナデにより器面を平滑にした後で、文様を施し、最終調整としてミガキが用いられる。ケズリはその痕跡を残すものが少なく、多くの場合はその後のナデ・ミガキにより、その有無を判別するのが難しい。ナデはほとんどの個体で文様施文以前に施される。32などのように頸部の最終調整にナデを施すものもある。条痕文も多くの個体に使用される。その原体には、14のようないわゆる「細密条痕」と呼ばれるものや、16のような条線間の広いもの、31のような櫛歯状の工具によるもの、32のような半截竹管状の工具と思われる条線の本数が少ないものなどが確認でき、極めて多様である。ミガキは本資料の最大の特徴である。一般的にミガキは頸部の無文部分にのみ横位に施される場合が多いが、本資料では縄文や条痕文などを施した上に最終調整として加えられている。これにより、文様がつぶれてはっきりしなくなっている例が多い。なお、このミガキは最終施文される文様とほぼ同じ方向に施される場合が多い。底部付近は、ケズリ・ナデにより「く」の字状に整形されるのが特徴的である。最終調整としてミガキを加えるものも多い。

内面調整も外面と同様にケズリ・ナデ・ミガキの順に行われる。ケズリは頸〜肩部の屈曲部に斜位に施されている例が多い。ナデは全面に施され、なかには33のように条痕文に類似するものもみられる。ミガキは口頸部で横位、頸〜肩部で斜位に施されるが、肩部以下はまばらになる。

深鉢形土器　外面調整は基本的に甕形土器と共通し、最終調整も同様にミガキが多用される。41などのように体部上位を無文とし、横位にミガキを加えるものが特徴的である。撚糸文は40や44のように条痕文と同様な施文方向で用いられる。

(2) 施文・調整方向について

次に、前述した外面施文・調整の方向についてみることとする。ナデ・ミガキ・条痕文・撚糸文の方向

は、各部位において縦位・横位・斜位のいずれかに施され、その組み合わせに一定の規則性を見いだすことができる。そこで、施文・調整方向の分類を試み、その特徴を探ることとしたい。

甕形土器は、口縁部・頸部においてほとんどが横位に行われ、肩部・体部上位・体部下位で施文・調整方向の変化がみられた。これらの組み合わせにより類型化を行った。深鉢形土器は、口縁部・体部上位・体部下位で変化がみられた。但し、口縁形態が複合口縁ａ類の場合は、口縁部で横位にのみ施文・調整が行われるため、類型化は体部上位以下の組み合わせをもって行うものとした。

施文・調整方向は大別して２種類あり、さらに細分した。また、施文・調整の種類には３種類があるため、これと施文・調整方向との組み合わせもみることとする（第表１・２）。なお、これらの分類については長野県御社宮司遺跡〔百瀬1982〕・石行遺跡〔竹原1987〕のものを参考とした。

施文・調整方向

Ａ型－体部下位では縦位に、上位にいくにしたがって斜位～横位に行うものを基本とする。

Ａａ型　甕形土器では肩部で横位、体部上位で斜位に行うもの。深鉢形土器では体部下位から口縁部にかけて縦位～斜位～横位に行うもの。

Ａｂ型　甕形土器では体部上位から肩部で斜位に行うもの。深鉢形土器では体部上位から口縁部で斜位に行うもの。

Ａｃ型　甕形土器では体部上位以下を縦位に、肩部を横位に行うもの。深鉢形土器では口縁部・体部上位を横位に、体部下位を縦位に行うもの。

Ｂ型－縦位を基本とするもの。

Ｂａ型　甕形土器では肩部以下を縦位とするもの。深鉢形土器では口縁部を横位に、体部上位以下を縦位に行うものを考えていたが、本資料に該当するものがなかった。

Ｂｂ型　全面縦位に施すもの。甕形土器に該当するものはなかった。

施文・調整の種類

(1) ナデ・ミガキ　(2) 条痕文・撚糸文のみ　(3) 条痕文・撚糸文＋ナデ・ミガキ

結　果

甕形土器では、方向Ａａ型・Ａｂ型・Ａｃ型・Ｂａ型がある。方向Ａ型が圧倒的に多く、Ｂ型は１点しか確認できなかった。組み合わせをみると、方向Ａａ・Ａｂ型では施文・調整の種類(1)～(3)までほぼ均等にみられたが、方向Ａｃ型では(2)が認められなかった。

深鉢形土器では、方向Ａａ型・Ａｂ型・Ａｃ型・Ｂｂ型が認められた。Ａ型ではＡａ・Ａｃ型が多い。なかでも39や41のように、体部上位を無文として横位にミガキを加えるものが一定量あり、注目される。また、甕形土器で認められなかったＢｂ型がみられる。組み合わせをみると、Ａａ型に(2)・(3)が多く、条痕文・撚糸文の施文率の高さが窺える。施文・調整の種類では(1)は少ないものの、Ａｃ型に集中する点で甕形土器と一致する。

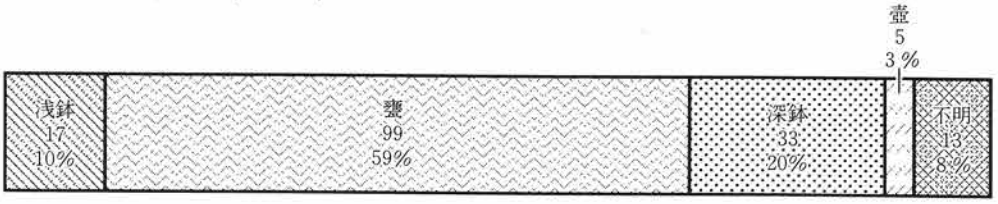
第１表　甕形土器調整・施文方向表（N＝23）

方向 / 種類	Ａａ型	Ａｂ型	Ａｃ型	Ｂａ型
(1) ナデ・ミガキ	4	3	3	0
(2) 条痕文・撚糸文	2	3	0	1
(3) 条痕文・撚糸文＋ナデ・ミガキ	2	3	2	0

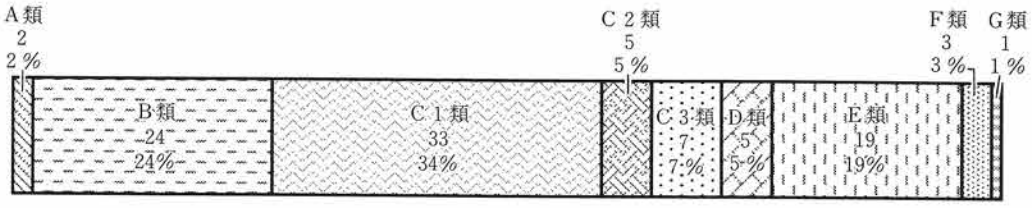
第２表　深鉢形土器調整・施文方向表

方向 / 種類	Ａａ型	Ａｂ型	Ａｃ型	Ｂｂ型
(1) ナデ・ミガキ	0	0	2	1
(2) 条痕文・撚糸文	3	1	1	1
(3) 条痕文・撚糸文＋ナデ・ミガキ	3	0	0	1

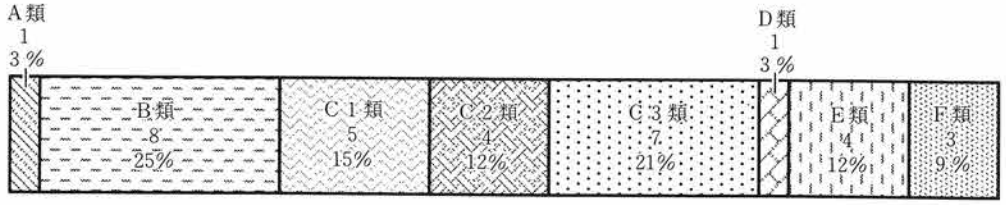
第３表　大別器種組成表（N＝167）



第４表　甕形土器組成表（N＝99）



第５表　深鉢形土器組成表（N＝33）



(3) 土器組成（第３表）

口縁片を有する土器で、同一個体を省き個体数を数えた。各器種とも口縁部に特徴があるため、小片でも個体識別が可能であり、小破片でも１個体とした。その結果、全個体数は167個体であり、その内訳は、浅鉢17個体（10%）、甕99個体（59%）、深鉢33個体（20%）、壺５個体（３%）、不明13個体（８%）という内訳となった。甕形土器が深鉢形土器の３倍と圧倒的に多く、浅鉢形土器は10%と少ない比率を示した。

4　長畑遺跡の編年的位置と地域性

新潟平野における縄文時代晩期終末の土器編年は、豊栄市鳥屋遺跡出土土器の分析により設定された鳥屋１式→２ａ式→２ｂ式の編年案を軸として、その変遷が把握されている〔石川1988〕。その中で、長畑遺跡１次調査資料は新発田市村尻遺跡126号土坑の一括資料〔田中ほか1982〕とともに、浮線文土器後半の鳥屋２ｂ式の基準資料とされた。ただし、長畑遺跡１次調査資料については発掘調査範囲が広範囲で、各資料の出土地点が不明なことから、その一括性が疑問視された。以後、安田町六野瀬遺跡の発掘調査において鳥屋２ｂ式土器の遺物集中地点が検出され〔石川ほか1992〕、この資料をもとに石川氏により再び鳥屋２ｂ式についてその型式学的独立性がより補強されることとなった〔石川1993〕。現段階では六野瀬遺跡ブロック１出土土器をもって鳥屋２ｂ式の基準資料ということができよう。よって、ここでは六野瀬遺跡資料との対比を中心として、長畑遺跡２次調査資料の各器種の特徴と編年的位置付けについて考察する。

浅鉢形土器の浮線文にはＡ１～Ａ５類があるが、いずれも文様帯が体部上位の狭い範囲に限定され、その多くが口縁部や体部下位とは連結せず、沈線により区画されていることを特徴とする。Ａ１類は浮線１条による網目状の構図をとるもので、六野瀬遺跡報告第10図18と網目の段数は異なるものの共通するモチーフであり鳥屋２ｂ式であろう。Ａ２類は本資料を特徴づけるもので、長畑遺跡１次資料のなかにもみられる（報文第13図１～３）。多条の浮線により横に間延びした「Ｚ」字状のモチーフを左右対称に描く構図は、Ａ１類などの均整のとれたモチーフが崩れたものであり、鳥屋２ｂ式のなかでも型式学的に新しいものとされている〔石川1985〕。同様の資料は村尻遺跡第126号土坑出土資料にあり、表面採集資料ではあるが出雲崎町乙茂飯田遺跡資料にも多くみられる〔寺村1957〕。Ａ３類も鳥屋２ｂ式にみられ、54のように交点部以外で浮線が分岐する手法はＡ２類と共通するものである。ただし、５は他と違い２本の隆線で表現されているほか、上部の列点文は鳥屋２ｂ式にはほとんどみられない要素であるため、鳥屋２ａ式に遡る可能性がある。Ａ４類は匹字文が上下対称になる構図で、浮線文土器にはあまりみられないモチーフである。Ａ５類も鳥屋２ｂ式であり、浮線文交点部の点刻は深鉢形土器Ａ類107とともに当該期の特徴といえよう。甕形土器は、頸部無文のものが大半を占める。また、小形・中形のほかに大形のものが目立つ。Ａ類では、65は浅鉢形土器Ａ３類の変形とも考えられ、66はＡ５類と、68はＡ１類と共通し、浮線２条単位で描く67とともに鳥屋２ｂ式に比定されよう。Ｂ類では大形のものでも肩部に文様帯をもつものが多い。80の肩部に施された半円状の弧線文は保明浦遺跡〔田畑ほか1996〕に類似したものがあるから、信濃川中流域の特色かもしれない。結節縄文を施すＣ１類は本資料を特徴づけるものであり、詳しく後述したい。Ｄ類32は鳥屋２ｂ式に普遍的に存在する。全面無文のＥ類が多い点も本資料の特徴である。前述した調整・施文方向では、Ａ型が主体的で、Ｂａ型が主体を占める氷式とは対照的であり、新潟平野における鳥屋２ｂ式の特徴を表すものといえよう[4]。深鉢形土器も大形のものが目立つ。108や116の口端を押圧して波状にする点も特徴的といえよう。また、体部上位を無文とする39・41などは甕形土器の頸部を意識しているものと考えたい。壺形土器は多様なものがみられた。118が鳥屋１式の広口壺、119は鳥屋２ｂ式であろうか。無文の125と

貝殻条痕文を施す126・127は大形品であり、鳥屋２ｂ式における弥生化現象とされている〔石川1991〕。

他地域との並行関係については、東北地方からの搬入品とみられる浅鉢形土器Ｃ類の匹字文を付す62・64がある。甕形土器13の肩部の文様は、いわゆる「変形匹字文」に類似するものと考えられる。同様のモチーフは1990年度確認調査資料の浅鉢形土器にもみられ、本遺跡が大洞Ａ$_2$式と密接な関係にあることが窺える。鳥屋２ｂ式が大洞Ａ$_2$式式と接点をもつことは、六野瀬遺跡資料おいてすでに指摘されており〔渡辺1992・石川1993〕、本資料によりさらに補強されたといえるであろう。

次に、長畑遺跡の地域性について述べたい。第４・５表は、甕形・深鉢形土器の文類別の組成表である。結節縄文を施すＣ１類が甕形土器34％、深鉢形土器15％と高い比率を示す。Ｂ類のなかにも結節縄文を用いる個体が多く含まれることから、その施文率がかなり高いことが特徴といえる。逆に、条痕文のみを施すＤ類は、甕形土器５％、深鉢形土器３％と非常に低い。結節縄文については、本遺跡と同じ信濃川中流域に位置する三条市上野原遺跡で、大洞Ｃ２式新段階並行の上野原式の深鉢形土器に多用され、長岡市藤橋遺跡・田上町保明浦遺跡の鳥屋２式に属する甕形土器にも用いられるなど、信濃川中流域では浮線文成立以前から鳥屋２ｂ式期まで結節縄文が多用されることが指摘できよう。一方、阿賀野川以北の地域をみると、新発田市舘ノ内遺跡〔田中ほか1992〕では、上野原式期の深鉢形土器に結節縄文が多用されるものの、鳥屋１式後半の65ａ号土坑一括資料では、工字文を施す甕形土器１点に結節縄文がみられるほかは、深鉢形土器６点すべてが条痕文を採用している。また、鳥屋遺跡では報告書をみる限り、鳥屋１式期で結節縄文を施す深鉢形土器が一定量みられものの、鳥屋２式期の甕形・深鉢形土器に結節縄文を使用するものは少ないようである。鳥屋２ｂ式の六野瀬遺跡では結節縄文を施す土器がみられない[5]。代わりに長畑遺跡と対照的に条痕文のみを施す土器が豊富である。以上から、阿賀野川以北の地域においては、上野原式期までは信濃川中・下流域と同様に結節縄文を多用するものの、鳥屋１式期になると遺跡により差がみられ、鳥屋２式期を境に全体的に減少するようである。特に鳥屋２ｂ式期には激減する。このように、鳥屋式土器が分布する新潟平野の中でも、信濃川中流域と阿賀野川以北の地域の間に明確な地域差が生じることが指摘できよう。

5　お　わ　り　に

長畑遺跡の資料を分析することにより、新潟平野における縄文時代晩期最終末の土器様相を明らかにすることが目的であった。しかし、ほかの遺跡について詳細に触れるまでには至らなかった。今後は、晩期終末の遺跡について甕形土器・深鉢形土器の構成を分析するとともに、施文・調整方向についてもデータの収集を図り、新潟平野における変遷過程や地域性、または周辺地域との関係について論じていきたい。

謝　　辞

本論は1991年に度新潟大学に提出した学士論文を基にしたものであり、作成にあたり指導教官であった小野　昭先生はじめ甘粕健先生、川村浩司氏からは多大なご指導いただいた。また、藤塚　明氏、宇野津正則氏からは長畑遺跡２次調査についての貴重なご教示を頂いた。松本市立考古学博物館、尖石考古館の各機関には資料収集の際に便宜を図っていただいた。資料の整理等には新潟大学の多数の後輩から協力頂いた。また、下記の方からもさまざまなご指導を頂いた。併せて感謝の意を表したい。

石川日出志、石川智紀、江口志麻、大橋雅彦、春日真実、川村浩司、桑原正史、小林正史、坂井秀弥、澤田　敦、田中耕作、田畑　弘、寺崎裕助、中村　渉、布尾幸恵、橋本博文、前山千佳、三ッ井朋子、百瀬長秀、渡邊朋和、渡邊裕之

註

1）筆者が上野原遺跡出土資料を実見した際に、上野原遺跡第16図１～４は同一個体であり、屈曲する頸部をもつ浅鉢形土器であることを確認している。

2）こうした整形方法は信州方面でみられる隆線帯〔竹原1987など〕に類似する。深鉢形土器42は沈線帯手法であろうか。

3）条痕紋と撚糸文の施文方向は共通する場合が多く、同一個体に施文されることも多い。浮線文土器に伴う条痕文の発生は、東北南部において撚糸文から変化したとする見解がある〔小林1991〕。

4）石行遺跡では、甕形・深鉢形土器を合わせて、Ｂ型が46％を占める〔竹原1987〕。また、御社宮司遺跡では、甕形土器の約34％がＢａ型である〔百瀬1982〕。

5）六野瀬遺跡では弥生時代に属する結節縄文が報告されている。また、杉原荘介氏による調査〔杉原1968〕にある結節縄文も弥生時代のものと考えられる。

引用・参考文献

家田順一郎　1990『長畑遺跡確認調査報告書』栄町教育委員会

石川日出志　1983「新潟県における縄文時代から弥生時代に至る土器群の推移」『第4回三県シンポジウム　東日本における黎明期の弥生土器』

1985「中部地方以西の縄文時代晩期浮線文土器」『信濃』第37巻４号

1988「鳥屋式土器の構成と意義」『豊栄市史　資料編１　考古編』

1991「縄文時代晩期浮線文土器出現期の編年と諸様相」『北越考古学』第４号

1993「鳥屋２ｂ式土器再考」『古代』第95号

石川日出志ほか　1992『六野瀬遺跡1990年発掘調査報告書』安田町教育委員会

磯崎正彦　1969「亀ヶ岡文化の外殻圏における終末期の土器型式」『石器時代』第９号

小出義治・寺村光晴　1962『鳥屋遺跡発掘調査報告』財団法人北方文化博物館

小林青樹　1991「浮線文土器様式の細密条痕技法」『國學院大學　考古学資料館紀要』第７

小林正史　1991「縄文時代終末期における東北地方中・南部間の地域差」『北越考古学』第４号

駒形敏朗　1977『藤橋遺跡　尾立遺跡　旧富岡農学校跡遺跡』長岡市藤橋遺跡等発掘調査委員会

駒形敏郎・寺崎裕助1977『藤橋遺跡』長岡市藤橋遺跡等発掘調査委員会

小山正忠・竹原秀雄　1994『新版標準土色帖』日本色研事業株式会社

鈴木正博　1991「栃木「先史土器」研究の課題(2)」『古代』第91号

須藤　隆　1973「土器組成論」『考古学研究』第19巻第４号

1987「東日本における弥生文化の受容」『考古学雑誌』第73巻第１号日本考古学会

関　雅之　1986「第三章第二節　弥生文化の始まり」『新潟県史　通史編』１　新潟県

竹原　学　1987「石行遺跡」『松本市赤木山遺跡群Ⅱ』長野県松本地方事務所松本市教育委員会

田畑　弘ほか　1996『保明浦遺跡　Ⅱ』田上町教育委員会

田中耕作ほか　1992『館ノ内遺跡Ｄ地点の調査』新発田市教育委員会

田中耕作・石川日出志　1982『村尻遺跡』新発田市教育委員会

中島栄一　1986「第二章第七節　縄文文化の終末」『新潟県史　通史編』１　新潟県

1981「Ⅲ　発掘調査された遺跡　二　上野原遺跡」『三条市史資料編　第１巻　考古一文化』

中島栄一ほか　1979『栄村文化財調査報告書第１輯　長畑遺跡』栄町教育委員会

中島栄一・渡邊朋和　1989「浮線網状文系土器様式」『縄文土器大観４』小学館

寺村光晴　1957「新潟県乙茂飯田遺跡と出土遺物について」『石器時代』第４号

戸根与八郎・本間信昭　1975『埋蔵文化財緊急調査報告書第４』新潟県教育委員会

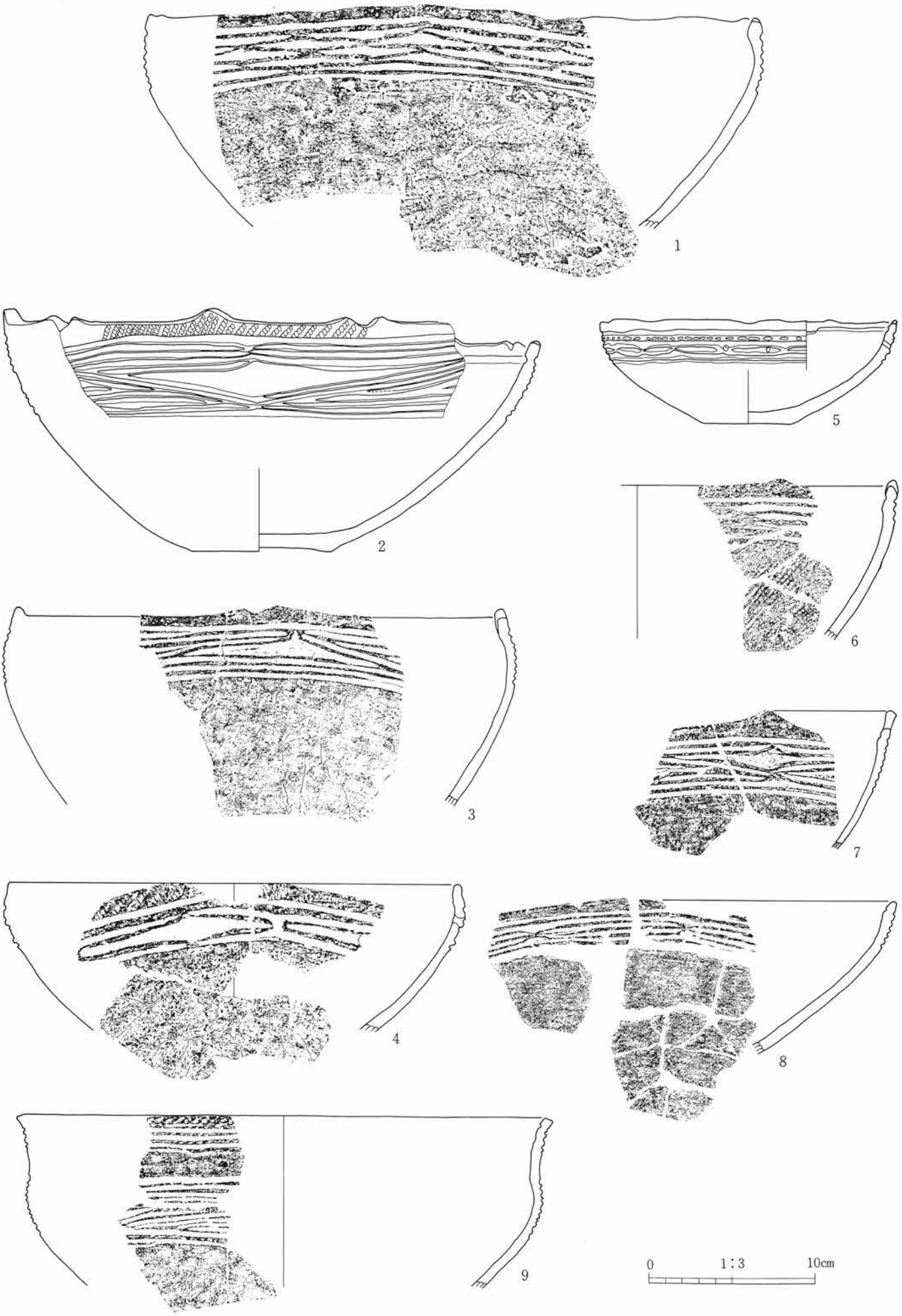
永峯光一　1969「氷遺跡の調査とその研究」『石器時代』第9号

芳賀英一　1986「下谷ヶ地平Ｂ・Ｃ遺跡」『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告書Ⅳ』福島県教育委員会

百瀬長秀　1982「御社宮司遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』茅野市　その５　日本道路公団名古屋建設局　長野県教育委員会

山内清男　1979『日本先史土器の縄紋』　先史考古学会

渡邊朋和　1990「新潟県における縄文時代晩期終末期から弥生時代中期前葉の土器」『新潟県考古学談話会会報』第６号

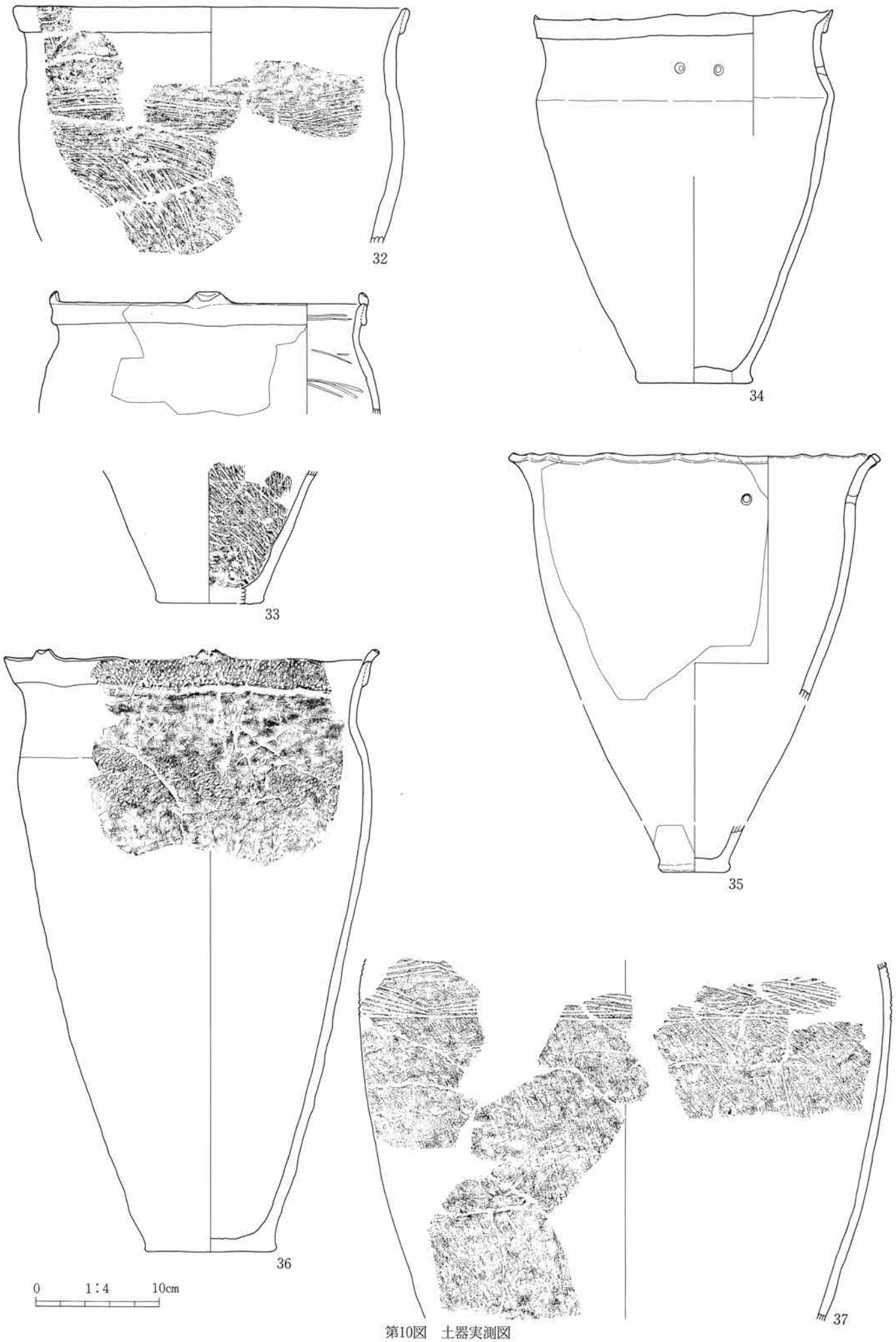


第6図　土器実測図

第7図　土器実測図

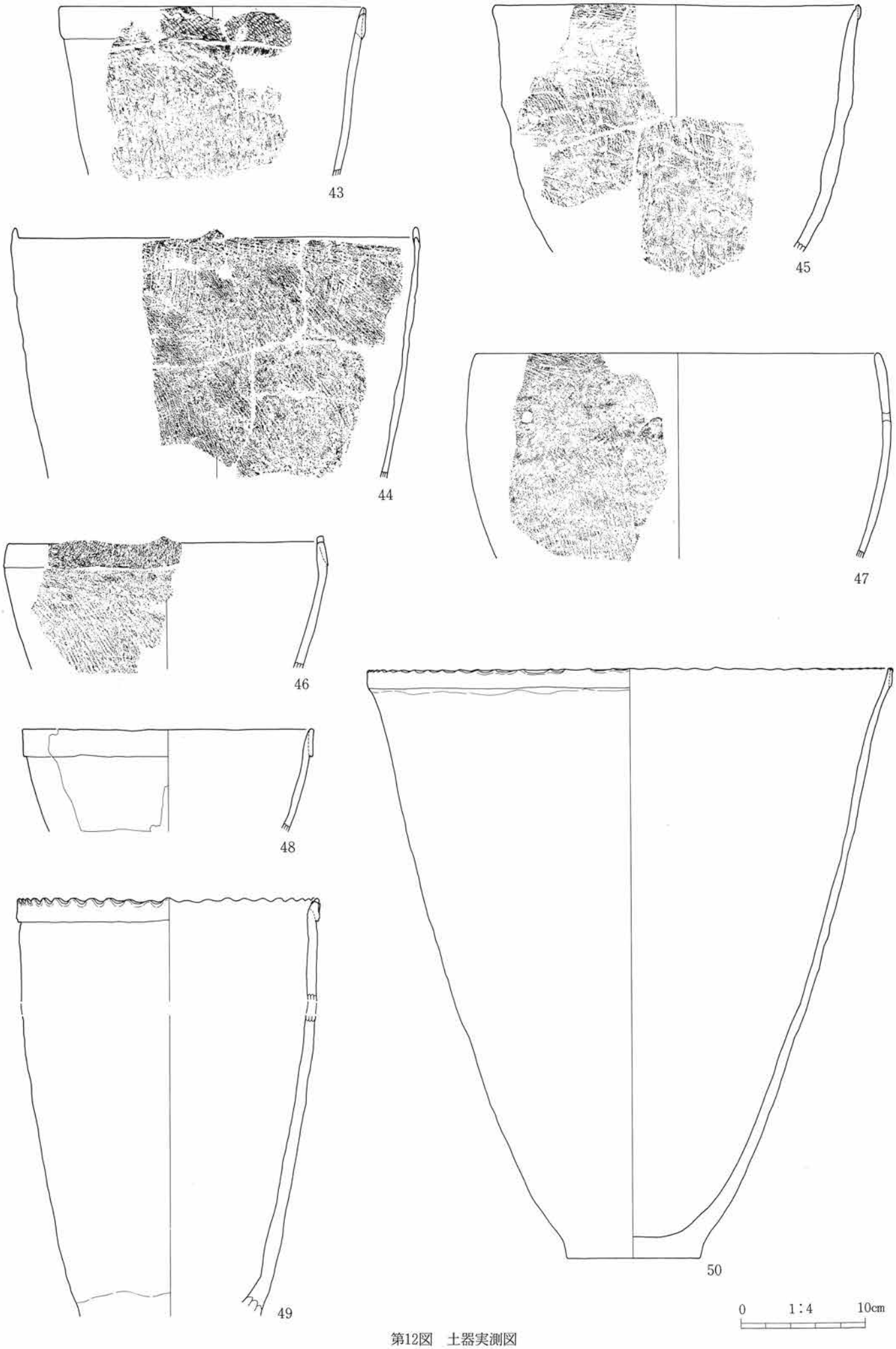
第8図　土器実測図

第9図　土器実測図

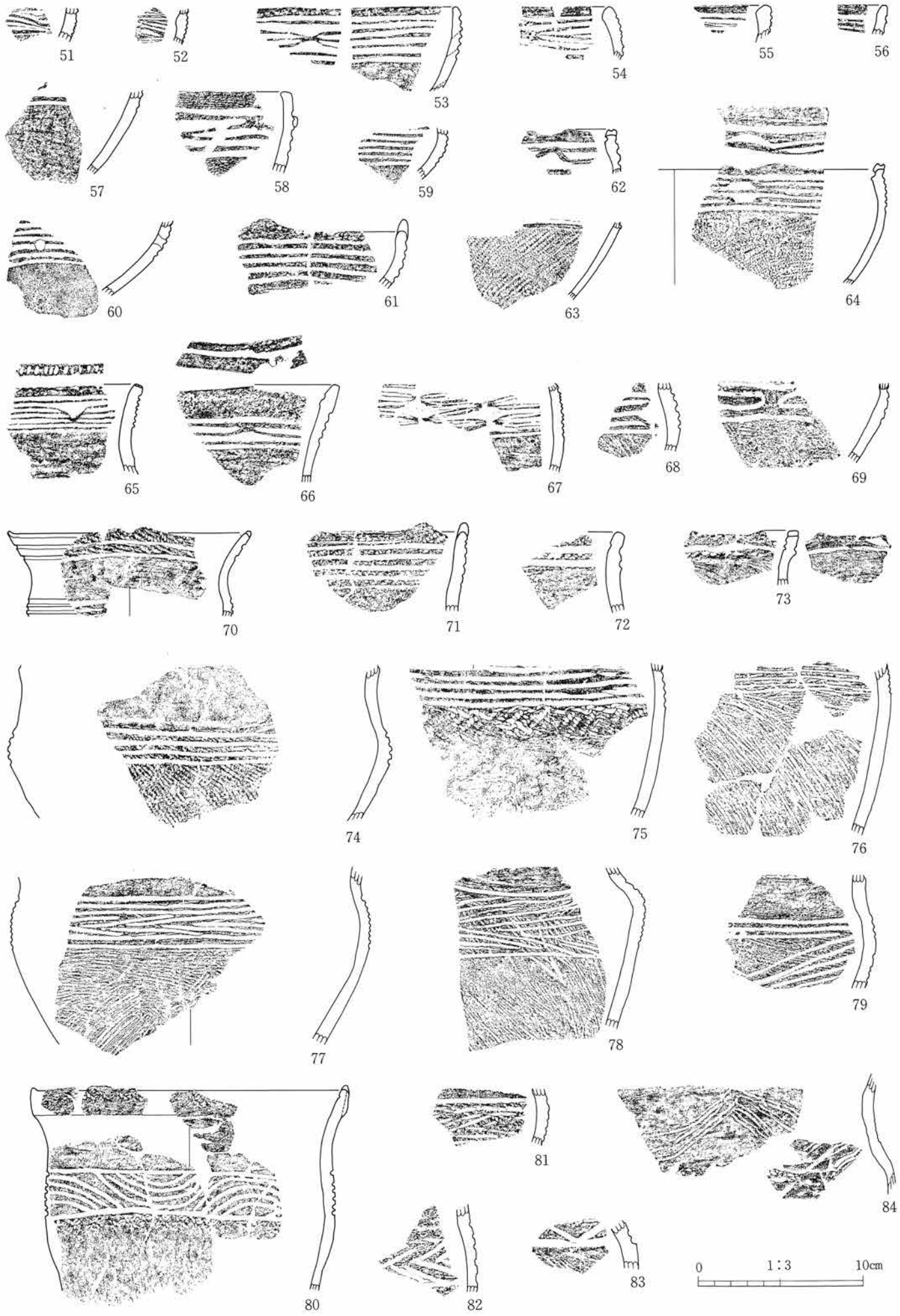


第10図　土器実測図

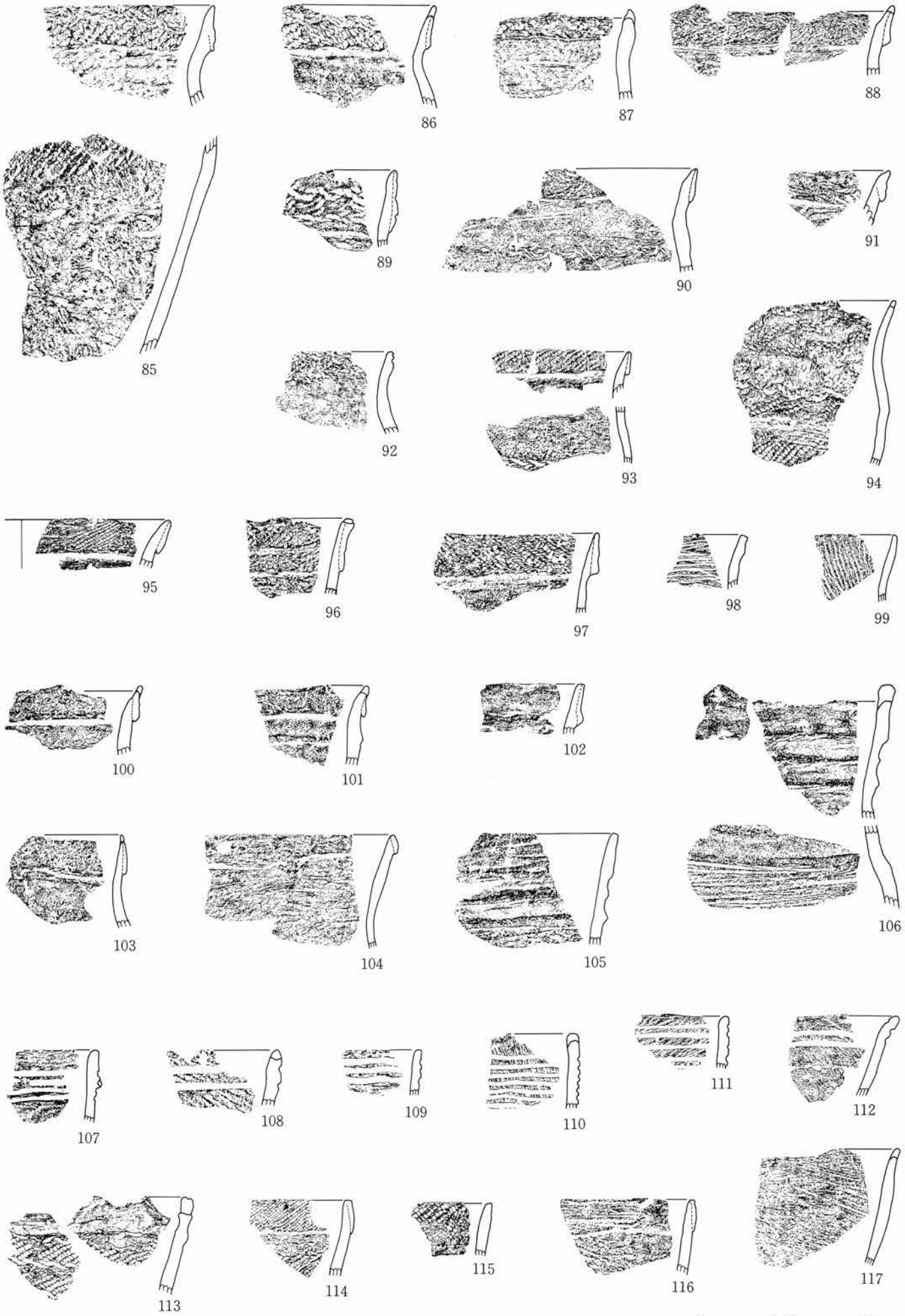
第11図　土器実測図



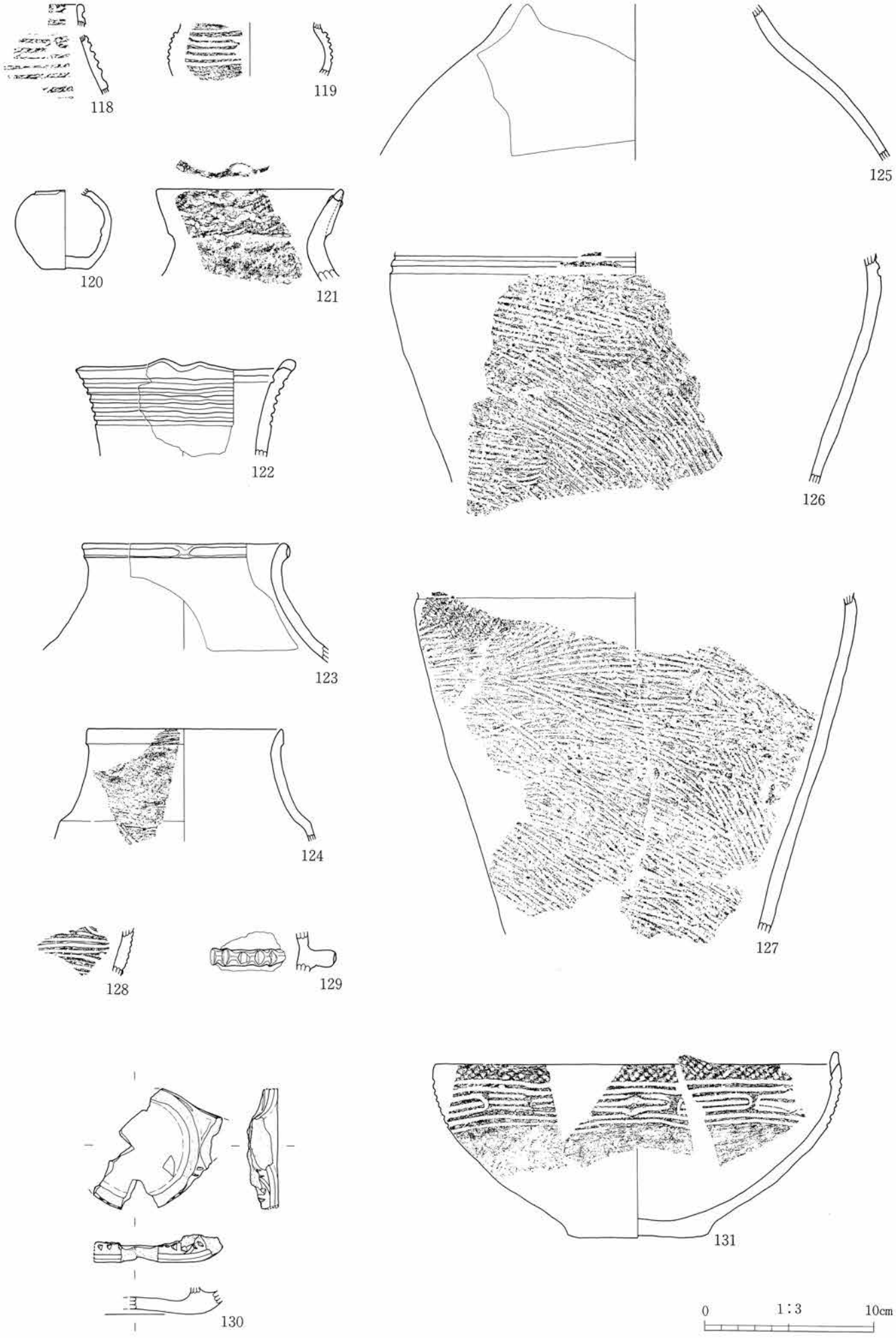
第12図　土器実測図


51
52
53
54
55
56
57
58
59
62
60
61
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
0
1:3
10cm

第13図　土器実測図


85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
0
1:3
10cm

第14図　土器実測図



第15図　土器実測図

浅鉢形土器観察表

No.	グリッド	層位	分類	器形	口縁端部	口縁部外面	体部上位	体部下位	底部付近	口縁内面	体部内面	底部内面	器高	口径	体径	底径	胎土	色調外面	色調内面	炭化物外面	炭化物内面
1	I 59	Ⅲ'～粘土	A 1	1	波状	ミガキ↔	浮線文・ミガキ	ミガキ↔	－	ミガキ↔	ミガキ↔	－	－	36.0	37.4	－	石英多い	10YR黒色	10YR黒褐色	有	有,漆?
2	G50	Ⅲ	A 2	2	突起	縄文ＬＲ	ミガキ・浮線文	ミガキ↔	ミガキ↔	沈線文・ミガキ↔	ミガキ↔	ナデ	14.5	32.4	－	8.4	長石等の砂粒多い	10YRにぶい黄橙色	10YR灰白色	下半	底部
3	G56・57	Ⅳ	A 2	1	突起	ミガキ↔	浮線文・ミガキ	ミガキ↔	－	ミガキ↔	ミガキ↔	－	－	29.8	31.0	－	雲母・金雲母	10YR黒褐色	10YR黒褐色	全面	全面
4	F35	Ⅲ	A 4	1	－	縄文ＬＲ	縄文LR＋浮線文・ミガキ↔・焼成後穿孔	ミガキ↔	－	荒いミガキ↔	荒いミガキ↔	－	－	27.2	27.8	－	金雲母・長石多い	10YR黒色	10YR暗褐色	全面に漆	有
5	G59	Ⅳ	A 3	2	波状	ミガキ↔	浮線文・列点文・ミガキ・焼成後穿孔	ミガキ↗	ミガキ↔	沈線文・ミガキ↔	ミガキ↘	ミガキ	6.0	17.8	－	5.1	1～4㎜の石英・長石多い	7.5YR褐灰色	7.5YR褐灰色	全面	有
6	F50	Ⅲ'	A 1	2	突起	摩滅	浮線文	縄文ＬＲ？	－	沈線文・ミガキ↔	ミガキ？	－	－	31.2	－	－	石英・長石等の砂粒多い	2.5Y灰黄色	10YRにぶい黄橙色	－	－
7	H59	Ⅲ	A 2	3	突起	ミガキ↔	浮線文＋ミガキ	ミガキ↔	－	ミガキ↔	ミガキ↔	－	－	－	－	－	1～3㎜の長石多い	10YR褐灰色	10YR灰黄褐色	体部	－
8	－	－	A 3	2	－	ミガキ	浮線文・ミガキ・赤彩	ミガキ↔	－	沈線文・ミガキ↔・赤彩	ミガキ↔	－	－	－	－	－	金雲母・石英・長石多い・海綿骨針	10YRにぶい黄橙色	10YR灰白色	体部	－
9	156	－	D	4	－	縄文ＬＲ＋平行沈線＋ナデ	縄文ＬＲ＋平行沈線文＋ナデ	羽状沈線文＋ミガキ・下半ミガキ↔	－	沈線文・ナデ↔	ナデ↔	－	－	32.2	30.8	31.2	石英・長石多い	7.5YR褐灰色	7.5YRにぶい橙色	－	－
51	162	Ⅲ	A 2	－	－	－	浮線文・赤彩	－	－	－	ミガキ↔	－	－	－	－	－	微細な雲母・砂粒	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	－	－
52	166	Ⅲ	A 2	2	－	－	浮線文・赤彩	－	－	肥厚	ミガキ↔	－	－	－	－	－	微細な雲母・長石	7.5YR褐灰色	7.5YR黒色	－	－
53	－	－	A 3	2	－	ミガキ↔	浮線文・ミガキ・赤彩	－	－	沈線文・ミガキ↘	－	－	－	－	－	－	微細な石英・長石	7.5YRにぶい褐色	10YR灰黄褐色	有	－
54	D～F 46～49	Ⅲ～粗砂	A 3	1	－	ミガキ↔	浮線文・ミガキ・赤彩	－	－	ミガキ↔	－	－	－	－	－	－	金雲母・長石1～4㎜の石英	10YR黄褐色	10YR黒褐色	有	有
55	D～F 46～49	Ⅲ～粗砂	A 3	1	－	ミガキ↔	浮線文・ミガキ・赤彩	－	－	ミガキ↔・肥厚	－	－	－	－	－	－	金雲母・長石	7.5YR褐色	7.5YR褐色	有	有
56	I 66	Ⅲ	A 3	2	－	ミガキ	浮線文・赤彩	－	－	ミガキ↔	－	－	－	－	－	－	微細な金雲母・長石・2㎜の石英	7.5YR褐灰色	7.5YR灰褐色	－	－
57	I 56	－	A 3	－	－	－	浮線文・ミガキ・赤彩	ミガキ↔	－	ミガキ↔	ミガキ↔	－	－	－	－	－	雲母、長石	10YR褐灰色	10YRにぶい黄橙褐色	有	有
58	H58	Ⅲ	A 5	1	－	ナデ↔	浮線文・ミガキ	－	－	ミガキ↔	－	－	－	－	－	－	1～2㎜の石英・長石多い	7.5YR黒褐色	7.5YR明褐灰色	有	－
59	I 59	Ⅲ	B	1	－	－	平行沈線文・ミガキ	ミガキ↔	－	－	ミガキ↔	－	－	－	－	－	雲母・石英・長石	10YR黒褐色	10YRにぶい黄褐色	有	－
60	I 48	－	B	－	－	－	平行沈線文・ミガキ・焼成後穿孔	ミガキ↔	－	－	ミガキ↔	－	－	－	－	－	雲母・黒雲母・石英	7.5YRにぶい褐色	7.5YRにぶい褐色	有	有,漆?
61	F33	Ⅲ	B	2	突起	ミガキ↔	平行沈線文・ミガキ・赤彩	－	－	ミガキ↔	－	－	－	－	－	－	石英・長石多い	10YR黒褐色	10YR黒褐色	有	有
62	G60	排土	C	1	突起・沈線	ミガキ↔	匹字文・ミガキ	－	－	沈線文・ミガキ↔・赤彩	－	－	－	－	－	－	雲母。石英僅か。	7.5YR黒色	10YR黒褐色	有	有
63	J53	Ⅲ	C	－	－	－	－	縄文ＬＲ	－	－	ミガキ↔	－	－	－	－	－	雲母・石英	10YR褐灰色	10YR褐灰色	有	有,漆?
64	G46？	－	C	1	突起・沈線・赤彩	ミガキ↔	匹字文・ミガキ	縄文ＬＲ	－	沈線文・ミガキ↔・赤彩	ミガキ↔	－	－	25.4	25.8	－	黒雲母。1～2㎜の石英・長石等の砂粒。	10YR黒褐色	10YR黒褐色	上半	漆？

長畑甕形土器観察表

No.	グリッド	層位	分類	器形	調整方向	口縁端部	口縁外面	頸部外面	肩部外面	体部上位	体部下位	底部付近	口頸内面	体部内面	底部内面	器高	口径	頸径	体径	底径	胎土	色調外面	色調内面	炭化物外面	炭化物内面
10	I 52	Ⅲ	Ba	3	−	浅い沈線	平行沈線・ナデ	ミガキ↔	平行沈線文・ナデ	縄文LR？↕+ナデ↔	縄文LR？↕+ナデ↕	ナデ↔	ナデ↔	ナデ↔	ナデ	35.3	29.0	26.4	27.0	9.4	2〜3㎜の石英・長石多い	5YR赤褐色	5YR赤褐色	上半	下半
11	D〜F 46〜49	？	Ba	3	Ab	−	縄文LR＋平行沈線文＋ナデ↕	ナデ↔＋縄文LR	平行沈線文・列点文	条痕↖	条痕↑	ナデ↔	ナデ	ナデ	ナデ	31.2	31.0	27.0	27.0	1.0	1㎜の長石多い。3㎜の砂粒	7.5YR褐色	7.5YR灰褐色	上半	上半
12	H54	Ⅲ	Bb	3	−	突起	平行沈線文＋ミガキ↔	ミガキ↔	平行沈線文＋ミガキ↔	−	−	−	ミガキ↔	ミガキ↔	−	−	26.8	23.8	25.8	−	1〜2㎜の長石などの砂粒	7.5YRにぶい褐色	7.5YRにぶい橙色	全面	−
13	H59	Ⅲ	Bb	2	Ab	突起	平行沈線文＋一部ミガキ↔	ミガキ↔	条痕文↖＋工字文	条痕文↖＋ナデ	条痕文↑＋ナデ	−	ミガキ↔	ミガキ↔	−	−	32.6	30.2	33.0	−	微細な長石	7.5YRにぶい褐色	7.5YR灰褐色	有	肩以下
14	E46	Ⅲ	Bb	1	Ab	突起	平行沈線文	ミガキ↔	条痕文↖＋羽状沈線文	条痕文↖	条痕文↑	ミガキ↔	ミガキ↔	ミガキ↔	ナデ	43.2	35.2	34.4	36.4	12.6	微細な金雲母・石英、1〜2㎜の長石	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色	体部上半以上	体部下半
15	F47	Ⅲ	Bb	2	Ab	小突起	縄文LR？＋平行沈線文	ミガキ↔	条痕文↖＋結節縄文LR（一部）＋ミガキ↔	条痕文↖＋ミガキ↕	条痕↑＋ミガキ↕	条痕↑＋ミ	ナデ↔	ナデ↔	ナデ	42.0	35.5	33.3	33.7	11.4	2〜3㎜の石英・長石多い	10YRにぶい黄橙色	10YR黄橙色	体部上半	体部下半
16	G46	Ⅲ	Ba	1	Ba	突起	縄文L＋ミガキ↔	ミガキ↔	平行沈線文	(平行沈線文+)条痕文↑	条痕文↑	−	ナデ↔	ミガキ↔	−	−	37.6	36.1	−	42.0	微細な砂粒多い	5YR赤褐色	5YR明赤褐色	体部上半以上	体部下半
17	F51	Ⅲ'	Bb	2	Aa	−	縄文LR？＋平行沈線文＋ナデ	ミガキ↔	条痕文↔	−	条痕文↑	−	ナデ↘	ナデ↔	−	−	35.2	34.0	35.0	−	1〜2㎜の雲母・金雲母・石英・長石多	10YR灰黄褐色	10YR浅黄橙色	口縁〜体部上半	体部。底部近く
18	H65	Ⅲ	Ba	3	−	突起	結節縄文LR＋平行沈線	結節縄文LR＋ミガキ↔	結節縄LR＋ナデ↔	−	−	−	ミガキ↔	ミガキ↔	−	−	26.0	23.2	25.4	−	微細な雲母・石英・長石多い	7.5YR褐灰色	7.5YR灰褐色	全面	−
19	G57	Ⅲ	Ba	3	Aa	突起	ミガキ↔	ミガキ↔	平行沈線文＋ミガキ↔	ミガキ↖↘	−	−	ミガキ↔	ミガキ↗	−	−	22.0	19.6	20.6	−	雲母・砂粒	10YRにぶい橙色	10YR灰褐色	全面	口縁
20	G45	Ⅲ	C1a	2	Ac	沈線・突起	結節縄文LR＋ナデ	ミガキ↔	結節縄文LR＋ミガキ↔	ミガキ↕	ミガキ↕？	ミガキ↔	ミガキ↔	ナデ	ナデ	25.8	22.4	19.8	20.2	9.4	長石多い	5YRにぶい赤褐色	5YRにぶい赤褐色	全面	体部下半
21	G48	Ⅲ'	C1a	1	Ab	−	結節縄文LR＋ミガキ↔	ミガキ↔	結節縄文R＋ミガキ↖↘	ケズリ↑+ナデ・ミガキ↕	ケズリ↑+ナデ・ミガキ↕	ケズリ↑	ミガキ↔・指	ナデ↔↕	ケズリ	45.7	35.2	34.0	37.6	10.0	4〜7㎜のチャート、砂粒多い	5YR橙色	5YR明赤褐色	体部上半以上	肩部以上
22	G45	Ⅲ	C1a	3	Ab	波状	結節縄文L	ミガキ↔	条痕文↖＋結節縄文L	条痕文↖＋ミガキ	条痕文↑＋ミガキ	ケズリ↑＋ミ	ナデ	ナデ	ナデ	36.4	31.4	29.4	29.8	9.6	微細な石英・長石多い	5YR赤褐色	7.5YRにぶい褐色	上半	−
23	−	−	C1a	3	Aa	小突起	結節縄文LR	ミガキ↔	結節縄文LR＋ミガキ↔	結節縄文LR＋ミガキ↖	結節縄文LR＋ミガキ↕	−	ナデ↔	ナデ↔	−	−	30.8	28.6	30.2	−	1〜2㎜の石英・長石多い	5YR赤褐色	5YR橙色	全面	口頸・体
24	H69	Ⅲ'	C1a	3	Ab	突起	ミガキ↔	ミガキ↔	結節縄文LR＋ミガキ↘	結節縄文LR＋ミガキ↖	−	−	ミガキ↔	ミガキ↗	−	−	26.0	24.0	25.2	−	雲母、長石わずか	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色	全面	口縁部
25	H54	Ⅲ	C1b	−	−	突起・沈線	結節縄文LR＋ミガキ↔	隆帯上列点文＋ミガキ↔	−	−	−	−	沈線・ミガキ	ミガキ↔	−	−	22.4	20.0	−	−	石英・長石多い	7.5YR褐色	7.5YR明褐色	全面	全面
26	H47 G51	Ⅲ上	C2a	1	Ac	−	弧状隆帯・第1類R＋ナデ↔	ミガキ↔	条痕文↑＋撚糸文R↔＋ミガキ＋	条痕文↑＋ミガキ↕	条痕文↑＋ミガキ↕↔	ミガキ↔	ナデ↔	ナデ↔	ナデ	36.2	22.0	20.0	25.5	10.5	石英・長石多い	5YR赤褐色	5YR明赤褐色	全体	肩・体部下半
27	H56	Ⅲ	C2b	3	Ca	波状	短軸絡条帯第1類R	ミガキ↔	短軸絡条帯第1類↔	短軸絡条帯第1類R↔		−	ナデ↔	ナデ	−	−	12.8	11.8	12.0	−	雲母多い	10YRにぶい橙色	10YRにぶい橙色	口頸	口縁
28	I 60？	−	C2b	1	Ac	突起	短軸絡条帯第5類R	ミガキ↔	短軸絡条帯第5類R＋ミガキ↔	条痕文↕？＋ミガキ↕	−	−	ミガキ↔	ミガキ↔	−	−	16.4	15.2	17.4	−	雲母・長石多い	5YR暗赤褐色	5YR暗赤褐色	有	−
29	J 53	Ⅲ	C2	−	Ac	−	−	ミガキ↔	短軸絡条帯第5類R＋ミガキ↔	ケズリ↑＋ミガキ↕	ケズリ↑＋ミガキ↕	−	ナデ↔	ケズリ↔	−	−	−	24.4	27.4	−	金雲母・石英・チャート	10YR黄褐色	10YR明黄褐色	肩〜体部中央	体部下半
30	I 57	−	C3b	3	−	−	縄文LR	縄文LR	条痕文↖	条痕文↑	条痕文↑	−	ナデ	ナデ	−	−	33.0	30.2	30.4	−	微細な長石	7.5YRにぶい橙色	7.5YR明褐灰色	体部	体部下半、底部
31	F49	Ⅲ	Da	1	Aa	突起	ナデ↔＋鋸歯状沈線文	ミガキ↔	条痕文←＋ミガキ↔	条痕文↖＋ミガキ↕	−	−	ナデ↔・ミ	ナデ↔	−	−	23.6	22.0	26.2	−	1〜3㎜の石英・長石・チャート・砂粒	5YR暗褐色	10YRにぶい黄橙色	体部	−
32	D〜F 46〜49	Ⅲ〜粗砂	Da	3	Aa	−	条痕文↔	ナデ↔	条痕文↔	条痕文↖	−	−	ナデ↔	ナデ↔	−	−	32.2	30.0	31.0	−	1〜2㎜の金雲母・長石多い	10YR暗褐色	10YRにぶい黄橙色	全面	−
33	F37・38	？	Ea	1	Aa	突起	ナデ↔	ミガキ↔	ミガキ↔	ナデ・ミガキ↘	ミガキ↖↘↗↔	−	ミガキ↔	ミガキ↔	ケズリ↘+ナデ	−	25.4	24.4	−	−	1〜2㎜の長石・砂粒、5㎜の小石	7.5YR橙色	7.5YR浅黄橙色	頸〜体部下位	−

No.	グリッド	層位	分類	器形	調整方向	口縁端部	口縁外面	頸部外面	肩部外面	体部上位	体部下位	底部付近	口頸内面	体部内面	底部内面	器高	口径	頸径	体径	底径	胎土	色調外面	色調内面	炭化物外面	炭化物内面
34	F50	Ⅲ	Ea	2	Ac	波状	ミガキ↔	ミガキ↔	ミガキ↔	ミガキ↕	ミガキ↕	ケズリ↔+ミガキ↔	ミガキ↔	ミガキ↔	ナデ	30.2	24.2	22.3	24.1	9.4	1～2mmの石英・長石	5YRにぶい赤褐色	5YRにぶい赤褐色	上半	下半・口縁
35	G48・49	Ⅲ下	Eb	3	Ab	波状	ミガキ↔	ミガキ↔	ミガキ↖↘	ミガキ↖↘	—	—	ミガキ↔	ミガキ↗↙	ケズリ↔+ナデ	—	29.6	26.2	26.2	5.8	1～2mmの石英・長石多い	5YR赤褐色	5YR橙色	体部上半以上	体部以下に僅か
36	E48	Ⅲ	Ga	2	Ab	突起	刺突文+一部ミガキ↔	ミガキ↔	刺突文+ミガキ↔	ミガキ↕	ミガキ↕	ミガキ↕↔	ミガキ↔	ミガキ↔	ナデ	49.2	30.6	27.0	28.8	10.8	長石	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	全面,頸・肩に多い	
37	E42	Ⅲ	B	—	—	—	—	—	羽状沈線文+ミガキ↕↔	条痕文↖↘+ミガキ↕↔	条痕文↖↘+ミガキ↔	—	—	ナデ+ミガキ↔	—	—	—	—	43.0	—	雲母・長石多い	7.5YR褐色	7.5YR褐色	肩・体部	—
65	F59	—	Aa	—	—	刻目文	浮線文	ミガキ↔	—	—	—	—	ミガキ↔	ミガキ↔	—	—	—	—	—	—	1～2mmの石英・長石多い	10YR褐灰色	10YR褐灰色	—	有
66	G～I 55～59	排土	Aa	—	—	突起	浮線文+ミガキ	ミガキ↔	—	—	—	—	ミガキ↔	—	—	—	—	—	—	—	1～2mmの石英・長石多い	10YR黒色	10YR黒褐色	全面	有
67	D～F 46～49	Ⅲ～粗砂	A	—	—	—	—	—	浮線文	条痕文↖	—	—	—	ナデ↔	—	—	—	—	—	—	1～2mmの石英・長石・砂粒多い	7.5YRにぶい褐色	7.5YRにぶい褐色	体部	—
68	D～F 46～49	Ⅲ～粗砂	A	—	—	—	—	—	浮線分+ミガキ↔	条痕文↖	—	—	—	ミガキ↔	—	—	—	—	—	—	雲母	10YR褐灰色	10YR褐灰色	—	—
69	—	—	A	—	—	—	—	—	工字文+ミガキ↔	ミガキ?	—	—	—	ミガキ↔	—	—	—	—	—	—	雲母・長石	10YR褐灰色	10YR黒色	有	有
70	I59	Ⅲ	Bb	3	—	突起	縄文R+平行沈線文	ミガキ↔	縄文R+平行沈線文	—	—	—	ミガキ↔	ミガキ↔	—	—	14.6	12.0	12.6	—	2mmの雲母・石英・長石多い	7.5YR橙色	10YR浅黄橙色	頸部	口頸に多い
71	H57	Ⅲ	Bb	—	—	突起	縄文LR+平行沈線文+ミガキ↔	ナデ↔	—	—	—	—	ナデ	ナデ	—	—	—	—	—	—	1～2mmの雲母・金雲母・石英・長石多い	10YR灰黄褐色	10YRにぶい黄橙色	全面	口縁に僅か
72	EF46	Ⅲ	Bb	1	—	—	縄文LR+平行沈線文+ミガキ↔	ミガキ↔	—	—	—	—	平行沈線文・ミガキ↔	—	—	—	—	—	—	—	微細な金雲母・石英・長石	10YR黒褐色	10YR黒色	全面	有
73	I53	Ⅲ	Ba	—	—	突起	縄文LR?+平行沈線文+ミガキ	ミガキ↖↘	—	—	—	—	平行沈線文・ミガキ↔	ミガキ↔	—	—	—	—	—	—	微細な雲母・長石多い	10YR黒褐色	10YR黒褐色	有	沈線内
74	I57	Ⅲ	B	—	—	—	—	ミガキ↔	縄文RL+平行沈線文・赤彩	縄文RL	—	—	ミガキ↔	ミガキ↔	—	—	—	21.6	23.4	—	雲母・長石	10YR褐灰色	10YR褐灰色	有・漆?	—
75	G54	Ⅲ	B	—	—	—	—	—	平行沈線文+ミガキ	結節縄文LR+ミガキ↖↘	—	—	—	ナデ	—	—	—	—	—	—	雲母・長石	10YR褐灰色	10YRにぶい黄橙色	有	—
76	HI49	Ⅲ	B	—	—	—	—	—	平行沈線文+(条痕文↖)	条痕文↖↔	—	—	—	ナデ↔	—	—	—	—	—	—	雲母・長石	10YR褐灰色	10YR褐灰色	有	有
77	—	—	B	—	—	—	—	ナデ↔	条痕文↔+羽状沈線文	条痕文↖↗	—	—	—	ミガキ↔	—	—	—	20.8	22.0	—	金雲母・雲母・長石	10YRにぶい黄橙色	10YR黒褐色	有	有
78	H67	Ⅲ	B	—	—	—	—	ナデ↔	条痕文↖+羽状沈線文	条痕文↖	—	—	—	ミガキ↔	—	—	—	—	—	—	金雲母・長石	10YR褐灰色	10YRにぶい黄橙色	有	有
79	I63	粘土	B	—	—	—	—	ミガキ↔	条痕文↖+羽状沈線文+ミガキ↔	—	—	—	—	ミガキ↔	—	—	—	—	—	—	雲母・長石	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色	有	—
80	H64、6	—	B	3	Aa	—	結節縄文RL	ミガキ↔	弧状沈線文+ミガキ↔	結節縄文RL+ミガキ↔	ミガキ↖↘↔	—	ナデ↔	ナデ↗↙	—	—	19.0	17.4	17.6	—	微細な長石多い。1mmの金雲母。	10YR黒褐色	10YRにぶい黄橙色	全面	体部
81	I59	Ⅲ	B	—	—	—	—	—	縄文RL+羽状沈線文	—	—	—	—	ミガキ↔	—	—	—	—	—	—	雲母・長石	10YRにぶい黄橙色	10YR褐灰色	有	—
82	D～F 46～49	Ⅲ～粗砂	B	—	—	—	—	ナデ?	撚糸文R+羽状沈線文	—	—	—	—	ミガキ↔	—	—	—	—	—	—	雲母・長石	10YR褐灰色	10YRにぶい黄橙色	多い	—
83	H51	Ⅲ	B	—	—	—	—	ナデ↔+鋸歯状沈線文	条痕文↖	—	—	—	—	ナデ↔	—	—	—	—	—	—	長石多い	10YR褐灰色	10YRにぶい黄橙色	有	—
84	H52	Ⅲ	B	—	—	—	—	波状沈線文+ミガキ↔	結節縄文LR+ミガキ↔	—	—	—	ナデ(条痕)↙	—	—	—	—	—	—	—	金雲母・長石	5YR暗赤褐色	5YR明赤褐色	有	—
85	H64	Ⅲ	Cla	—	Aa	—	結節縄文L	ミガキ↔	縄文LR+ミガキ↔	ミガキ↔↖↘	—	—	ミガキ↔↖↘	ナデ	—	—	—	—	—	—	2～3mmの砂粒多い。長石	5YR明赤褐色	5YR橙色	口縁・体部下	—

No.	グリッド	層位	分類	器形	調整方向	口縁端部	口縁外面	頸部外面	肩部外面	体部上位	体部下位	底部付近	口頸内面	体部内面	底部内面	器高	口径	頸径	体径	底径	胎土	色調外面	色調内面	炭化物外面	炭化物内面
86	I 63	粘土	C1a	−	−	突起	結節縄文LR＋ミガキ↔	ミガキ↔	−	−	−	−	ミガキ↔	−	−	−	−	−	−	−	1〜2㎜の雲母・石英・長石多い	5YR赤褐色	5YRにぶい赤褐色	有	有僅か
87	I 53かJ 53	−	C1a	−	−	突起	結節縄文R＋ミガキ↔	ミガキ↔	−	−	−	−	ミガキ↔	−	−	−	−	−	−	−	1〜2㎜の石英・長石多い	5YR赤褐色	5YR赤褐色	口縁	有
88	I 63	粘土	C1a	−	−	小突起	結節縄文LR	ミガキ↔	−	−	−	−	ミガキ↔	ミガキ↔	−	−	−	−	−	−	雲母・石英・長石	7.5YR褐色	7.5YR褐色	有	−
89	F 51	Ⅲ	C1a	−	−	突起	結節縄文L	ミガキ↔	−	−	−	−	ナデ↔	−	−	−	−	−	−	−	雲母・石英・長石	7.5YRにぶい褐色	7.5YRにぶい褐色	頸部	−
90	H64	粘土	C1a	−	−	−	結節縄文LR＋ナデ↔	ミガキ↔	結節縄文LR＋ミガキ↔	−	−	−	ミガキ↔	−	−	−	−	−	−	−	金雲母・石英・長石	7.5YR褐色	7.5YR褐色	有	有
91	D〜F 46〜49	Ⅱ〜粗砂	C1a	−	−	−	結節縄文LR＋ミガキ↔	ミガキ↔	−	−	−	−	ミガキ↔	ミガキ↔	−	−	−	−	−	−	1〜3㎜の長石多い	5YRにぶい赤褐色	5YRにぶい赤褐色	口縁	−
92	F 51	Ⅲ	C1a	−	−	−	結節縄文L	ミガキ↔	−	−	−	−	ナデ↔	ナデ↔	−	−	−	−	−	−	石英・長石多い	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口縁	−
93	G49	Ⅲ	C1a	−	−	−	縄文L	ミガキ↔↘	結節縄文L	−	−	−	ナデ↔	ナデ↔↘	−	−	−	−	−	−	1〜2㎜の石英・長石	10YR黒褐色	10YR黒褐色	全面	有
94	I 52	Ⅲ	C1b	3	−	突起	結節縄文LR	ミガキ↔	結節縄文LR	縄文LR	−	−	ナデ↔↘	ナデ↔	−	−	−	−	−	−	1〜2㎜の雲母・長石・砂粒	10YR褐灰色	10YRにぶい黄橙色	全面	−
95	−	−	C2a	−	−	−	撚糸文L	ミガキ↔	−	−	−	−	ミガキ↔	−	−	−	−	−	−	−	微細な石英・長石	7.5YRにぶい黄橙色	7.5YR褐灰色	頸部	有
96	H60	Ⅲ	C3a	−	−	突起	縄文L	ミガキ↔	−	−	−	−	ミガキ↔	−	−	−	−	−	−	−	砂粒	7.5YR暗褐色	7.5YR褐色	有	有
97	G46	Ⅲ	C3a	−	−	−	付加条縄文	ミガキ↔	−	−	−	−	ナデ↔	ナデ↔	−	−	−	−	−	−	砂粒多い	5YR橙色	5YR明赤褐色	有	−
98	J 53	Ⅲ	Da	−	−	−	条痕文↔	条痕文↔	−	−	−	−	ミガキ↔	ミガキ↘	−	−	−	−	−	−	2㎜の金雲母・石英・長石	10YRにぶい黄橙色	10YR褐灰色	有	有
99	G58	Ⅲ	Db	−	−	突起	条痕文↖	条痕文↖	−	−	−	−	ナデ↗	−	−	−	−	−	−	−	砂粒多い	7.5YR浅黄橙色	7.5YR浅黄橙色	−	−
100	G51	Ⅲ	Eb	−	−	突起	ミガキ↔	ミガキ↔	−	−	−	−	ナデ↔	−	−	−	−	−	−	−	雲母・石英・長石	5YRにぶい赤褐色	5YR赤褐色	有	−
101	H59	Ⅳ	Ea	2	−	小突起	ミガキ↔	ミガキ↔	ミガキ↔	−	−	−	ミガキ↔	ミガキ↔	−	−	−	−	−	−	雲母	7.5YR暗褐色	7.5YR暗褐色	有	有
102	I 62	Ⅲ	Ea	−	−	−	ミガキ↔	ミガキ↔	−	−	−	−	ミガキ↔	−	−	−	−	−	−	−	雲母・長石多い	5YR赤褐色	5YR赤褐色	−	−
103	H62	Ⅳ	Ea	1	−	小突起	ナデ↔	ミガキ↔	−	−	−	−	ナデ↔	−	−	−	−	−	−	−	長石	10YR黒褐色	10YR灰黄褐色	有	有
104	I 47	Ⅲ	Ea	−	−	−	ナデ↔	ミガキ↔	ミガキ↔	−	−	−	ミガキ↔	−	−	−	−	−	−	−	金雲母・石英・長石多い	10YR褐灰色	10YR褐灰色	有	−
105	I 63	粘土	Fa	−	−	−	沈線帯・ミガキ↔	−	−	−	−	−	ケズリ＋ナデ	−	−	−	−	−	−	−	1〜2㎜の石英・長石。6㎜の長石。	10YR褐灰色	10YR褐灰色	有	−
106	I 59	Ⅲ	Fa	−	−	突起	沈線帯・ミガキ↔	ナデ↔	条痕文↔	−	−	−	ミガキ↔	ケズリ↖	−	−	−	−	−	−	石英・長石	10YR褐灰色	10YR褐灰色	有	−

深鉢形土器観察表

No.	グリッド	層位	分類	器形	調整方向	口縁端部	口縁外面	体部上位	体部下位	底部付近	口縁内面	体部内面	底部内面	器高	口径	体径	底径	胎土	色調外面	色調内面	炭化物外面	炭化物内面
38	F49	Ⅲ	Ba	1	Aa	—	平行沈線文	条痕文←↖	条痕文↑	—	ナデ↔	ナデ↔	—	—	35.6	36.6	—	1～2㎜の石英・長石多い	10YR灰黄褐色	2.5YR灰黄色	全面	体部下半
39	H I 49	Ⅲ	Bb	3	Aa	—	羽状沈線文	ミガキ↔	条痕文↖↑＋ミガキ↔↑	ミガキ↔	ナデ↘	ナデ↘	ナデ	38.0	34.0	—	9.8	1～2㎜の雲母・石英・長石	2.5YR灰黄色	2.5YR灰黄色	上半	下半
40	E45	Ⅲ	C2b	2	Aa	—	撚糸文R↔	撚糸文R↘	撚糸文R↕	ミガキ↔	ナデ	ナデ	ナデ	41.8	33.4	36.8	10.0	長石・砂粒多い	10YRにぶい黄褐色	10YR褐灰色	体部	体部下半
41	G46	Ⅲ	C3a	3	Aa	波状	縄文LR	ミガキ↔	条痕文↖↑＋ミガキ↕	ナデ↔	ナデ↔	ナデ・ミガキ↔	ナデ↘	39.5	34.0	—	10.8	1～3㎜の石英・長石	5 YR明赤褐色	5 YR明赤褐色	全面	口縁
42	F52	Ⅲ'	F	2	Bb	波状	沈線帯・ナデ	条痕文↑	条痕文↑	ナデ	ミガキ↘↗	ナデ↕	ナデ	35.0	30.8	—	10.6	1～2㎜の石英・長石	10YR褐灰色	10YR褐灰色	上半	上半
43	C13	Ⅲ	C1a	2	Bb	突起	結節縄文LR＋条痕文↑	結節縄文LR＋ミガキ↔	条痕文↑＋ミガキ↕	—	ナデ↔↗	ナデ↔↗	—	—	24.6	—	—	1～2㎜の砂粒多い	5 YR明赤褐色	5 YR明赤褐色	有	—
44	H54	Ⅲ	C2b	3	Aa	突起	撚糸文R↔	撚糸文R↖	撚糸文R↖	—	ナデ↔	ナデ↔	—	—	32.4	—	—	砂粒多い	7.5YR明褐色	7.5YR橙色	体部上半以上	体部
45	F47	Ⅲ	C2a	3	Ac	—	短軸絡条帯第4類↔	ミガキ↔	短軸絡条帯第4類↕＋ミガキ↕	—	ナデ・ミガキ↔	ケズリ↔＋ミガキ↔↕	—	—	29.4	28.6	25.4	1～2㎜の石英・長石。大粒の砂粒。	7.5YR灰褐色	10YRにぶい黄橙色	上半	—
46	E45	Ⅳ上	C3a	1	Ab	突起	縄文LR	条痕文↖	—	—	ミガキ↔	ミガキ↔	—	—	25.6	26.0	—	雲母、長石多い	10YR黒褐色	10YR黒褐色	全面	—
47	E47	Ⅲ'下	Da	1	Aa	—	条痕文←＋ミガキ↔焼成後穿孔	条痕文↖＋ミガキ↔	条痕文↑	—	ナデ	ナデ	—	—	32.4	34.2	—	1～2㎜の砂粒多い	7.5YR灰褐色	7.5YR灰褐色	全面	有
48	I 56	—	Ea	2	—	—	ミガキ↔	ミガキ↔	—	—	ナデ↘	ナデ↘	—	—	23.4	—	—	長石・砂粒多い	10YR灰白色	10YR浅黄橙色	—	—
49	I 59	Ⅲ	Ea	2	Ac	波状	ミガキ↔	ミガキ↔	ミガキ↔	ミガキ↔	ミガキ↔	ミガキ↔	—	—	24.2	—	—	1～2㎜の雲母・石英・長石多い	7.5YRにぶい褐色	10YRにぶい黄橙色	上半	下半
50	E52	Ⅲ'	Ea	3	Ac	波状	ミガキ↔	ミガキ↔	ミガキ↔	ミガキ↔	ミガキ↔↕	ミガキ↔↕	ミガキ	47.3	42.4	—	10.6	2～3㎜の砂粒	7.5YRにぶい褐色	7.5YRにぶい褐色	上半	下半
107	G59	Ⅲ下	Ab	2	—	—	浮線文・ミガキ	—	—	—	ミガキ	—	—	—	—	—	—	雲母・金雲母・長石多い	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色	—	—
108	E46	Ⅲ下	Bb	3	—	突起	縄文R＋平行沈線文	—	—	—	ナデ・ミガキ↔	—	—	—	—	—	—	1～2㎜の金雲母・石英・長石多い	7.5YR灰褐色	7.5YRにぶい橙色	有	—
109	G50	Ⅲ	Bb	3	—	—	縄文LR?＋平行沈線文	—	—	—	ナデ↔	—	—	—	—	—	—	金雲母・長石	7.5R褐色	10YRにぶい黄橙色	有	—
110	H54	Ⅲ	Bb	2	Bb	突起	条痕文↑＋平行沈線文	—	—	—	ナデ↘↗	—	—	—	—	—	—	金雲母・石英・長石多い	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色	有	—
111	I 63	Ⅲ	Bb	2	—	—	条痕文↗＋平行沈線文	—	—	—	ナデ	—	—	—	—	—	—	雲母、1～2㎜の石英・長石多い	10YR黒褐色	10YR黒褐色	有	有
112	F50	Ⅲ下	Bb	3	—	—	ナデ↘＋平行沈線文	ミガキ↔	—	—	平行沈線文・ミガキ↔	ミガキ↔	—	—	—	—	—	石英・砂粒	7.5YR灰褐色	7.5YR灰褐色	有	—
113	I 54	Ⅲ上	C1b	3	—	突起	上端ミガキ↔・結節縄文LR＋ミガキ↔	—	—	—	平行沈線文・ミガキ↔	—	—	—	—	—	—	雲母・長石多い	10YR褐灰色	10YR黄褐色	—	—
114	I 62	粘土	C2a	2	—	—	撚糸文R	縄文LR＋ミガキ↔	—	—	ナデ↔↗	—	—	—	—	—	—	雲母・長石僅か	7.5YR灰褐色	7.5YRにぶい褐色	有	有
115	I 58	Ⅲ'	C3b	—	—	—	縄文LR	—	—	—	ナデ↔	—	—	—	—	—	—	長石	10YRにぶい黄褐色	10YRにぶい黄褐色	—	—
116	I 63	粘土	Da	3	—	—	条痕文↔＋ミガキ↔	条痕文↖＋ミガキ↔	—	—	ケズリ↔＋ミガキ↔	—	—	—	—	—	—	石英、1～3㎜の長石多い	7.5YR灰褐色	7.5YR灰褐色	全面	口縁
117	H63	Ⅲ	Eb	3	—	突起	ナデ↖↘	ナデ↖↘	—	—	ナデ↔	ナデ↔	—	—	—	—	—	金雲母、石英・長石多い	10YR暗褐色	7.5YRにぶい橙色	口縁	口縁

長畑壷形土器観察表

No.	グリッド	層位	器種	口縁形態	口縁外面	頸部外面	肩部外面	体部上位	体部下位	底部付近	口頸内面	体部内面	器高	口径	頸径	体径	底径	胎土	色調外面	色調内面	炭化物外	炭化物内
118	H67	Ⅲ'	A	−	縄文L＋工字文・赤彩	縄文L＋工字文・赤彩	−	−	−	−	ナデ	−	−	−	−	−	−	金雲母・石英・長石	10YRにぶい黄褐色	10YR灰黄褐色	−	体部
119	G49	Ⅲ	B	−	−	ナデ↔	浮線文・ナデ	ナデ	−	−	−	ナデ↔	−	−	−	9.8	−	雲母	10YR褐灰色	10YRにぶい黄橙色	有	−
120	I63	−	B	−	−	−	平行沈線文・ミガキ↔	ミガキ↔	ミガキ↔↕	ミガキ↕	−	ナデ	−	−	−	5.4	2.8	雲母・金雲母・長石	7.5YR浅黄橙色	7.5YR褐灰色	−	−
121	G57	Ⅳ	C	突起	結節縄文L＋ミガキ↔	ミガキ↔	−	−	−	−	ミガキ↔	−	−	11.2	8.8	−	−	1〜2㎜の雲母・石英・長石等の砂粒多い	7.5YR明褐色	7.5YR明褐色	−	−
122	I55	Ⅲ	D	突起	平行沈線文＋ミガキ↔	ミガキ↔	−	−	−	−	平行沈線文・ミガキ↔	−	−	12.8	−	−	−	長石多い	10YRにぶい黄橙色	10YR褐灰色	有	−
123	H59	Ⅲ	E	−	口外帯状・ミガキ↔	ミガキ↔	ミガキ↘	−	−	−	ミガキ↔	ナデ↗	−	12.4	11.6	−	−	金雲母、1〜3㎜の砂粒	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色	−	−
124	G65	排土	E	−	条痕文?↔	ミガキ↔	条痕文?↖	−	−	−	ミガキ↔	ナデ↔	−	11.6	11.4	−	−	1〜2㎜の砂粒僅か	10YR黒褐色	10YR黒褐色	有	−
125	F49	Ⅲ	F	−	−	ナデ↔・器面摩滅	ナデ↔・器面摩滅	−	−	−	−	ナデ↔↘・ミガキ↔	−	−	−	−	−	石英	7.5YR橙色	10YR褐灰色	−	有
126	D〜F 46〜49	Ⅲ〜粗砂	G	−	−	−	平行沈線文	条痕文←	条痕文↖	−	ミガキ↔	ミガキ↔	−	−	−	29.2	−	雲母・金雲母・長石	10YR褐灰色	10YRにぶい黄橙色	有	−
127	F36	Ⅲ	G	−	−	−	縄文LR＋平行沈線文	条痕文←	条痕文↖	−	−	ミガキ↔	−	−	−	26.2	−	長石多い	10YR灰黄褐色	10YR黄褐色	有	有
128	I56	Ⅲ	H	−	−	−	−	−	平行沈線文・渦巻文・赤彩	−	−	ナデ↔	−	−	−	−	−	長石	10YR褐灰色	10YR灰白色	−	−
129	G41	Ⅲ	I	−	−	−	突帯上に刻目文	−	−	−	−	ケズリ↑	−	−	−	−	−	雲母・長石	5YRにぶい赤褐色	5YRにぶい橙色	有	−

異形土器観察表

No.	グリッド	層位	器形	口縁端部	口縁外面	体部上位	体部下位	底部付近	口縁内面	体部内面	底部内面	器高	口径	体部	底径	胎土	色調外面	色調内面	炭化物外	炭化物内
130	F56	Ⅲ	−	−	−	−	−	沈線文・刻目文・赤彩	−	−	ナデ	−	−	−	26.0	雲母・金雲母・長石	10YR褐灰色	10YR褐灰色	−	−

1990年確認調査資料

No.	器形	口縁部	体部上位	体部下位	底部付近	口縁内面	体部内面	底部内面	器高	口径	体径	底径	胎土	色調外面	色調内面	炭化物外	炭化物内
131	2	縄文LR	浮線文	ミガキ↔	ミガキ↔	肥厚・平行沈線文	ミガキ	ミガキ	10	24	−	8.4	雲母・長石	10YR黄褐色	10YR黄褐色	全面	上半